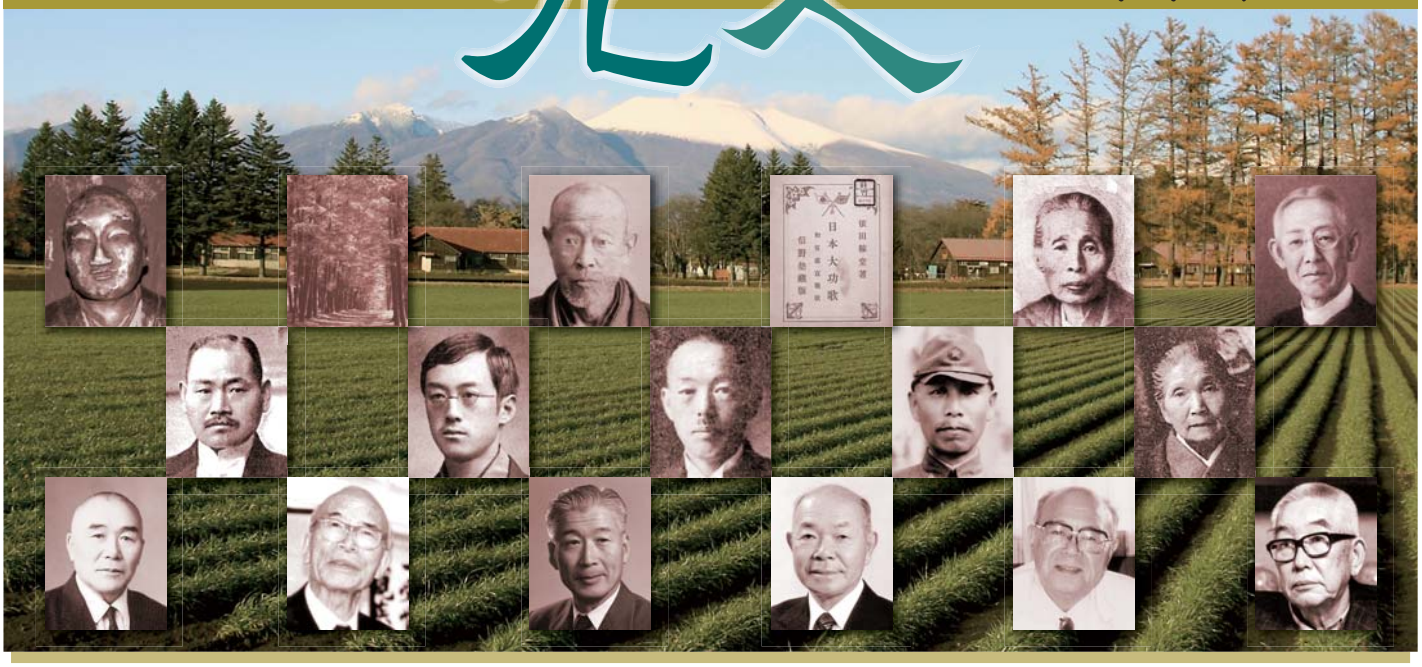
広報佐久

SAKU
Public Information
2013 平成25年

別冊

http://www.city.saku.nagano.jp

佐久の先人 検討事業



佐久の先人（第二次選定18人）

小林孫左衛門 …… 2p～
松本谷吉 …… 4p～
清水清吉
市川又三 …… 6p～
依田稼堂 …… 8p～
岡村政子 …… 10p～
瀬下清 …… 12p～
篠原和市 …… 14p～
神津猛 …… 16p～
小池森太郎 …… 18p～
小池勇助 …… 20p～
柳本みつの …… 22p～
森泉武重 …… 24p～
中澤周三 …… 26p～
相馬遷子 …… 28p～
田中文雄 …… 30p～
吉沢國雄 …… 32p～
松井康成 …… 34p～

先人の紹介文作成にあたっては、なるべくエピソードや写真を交え、読みやすさを考慮しております。
文献・資料や寄せられた情報を基に、正確な記述となるよう心掛けておりますが、万が一内容に事実誤認、問題等がございましたら、文化振興課までご連絡ください。

佐久の先人検討委員会・佐久市教育委員会

佐久の先人たち⑲

宝暦騒動の中心的農民

小林孫左衛門

（1721～1756年）

小林孫左衛門は割元という重職にあったが、役所の年貢収奪に強い不満を持っていた。1754（宝暦４）年、浅間山の噴火に旱魃が重なったため、強い義侠心から仲間とともに全藩一揆を主導したとされている。

●義人とされた孫左衛門

小林孫左衛門清茂は、一七二一（享保６）年田野口村（現佐久市田口）に生まれ、一七四四（延享元）年若くして割元に就任している。

一七〇四（宝永元）年から田野口を大給藩（後の奥殿藩→龍岡藩）が所領することとなり、しばらくして支配役所（陣屋）が田野口に置かれた。割元は陣屋と領民の間に立って連絡や調整を図る重要な役であり、人格に優れかつ資産がある者が就いていた。

伝承によると、大給藩が田野口を治めるようになった後、年貢取り立てが厳しかったところに凶作が重なり、領民が減税を訴えたが聞き入れられなかった。幼いころから聡明で、岳父の跡を継いで割元となっていた孫左衛門は、藩と領民の間に立って調整に努めたものの、抑えきれず一揆となってしまい、孫左衛門は騒動の首謀者として処刑されたとされている。

孫左衛門の死から一八〇年以上経った一九四〇（昭和15）年、近隣の町村からも賛同者が集まって組織された孫左衛門の顕彰会が中心となり、「皇紀二千六百年」の全国的な国威発揚の動きに合わせ、「義人小林孫左衛門之碑」が建立された。

義人小林孫左衛門之碑
佐久市田口の能満寺の裏に建立されている。

●騒動の実相

騒動の直接的原因は、田野口村反田地籍の年貢が高く、領民の不満が大きかったことにあった。騒動の中心的人物であった源蔵（前名主）・忠助（年寄）・源五右衛門（年寄）は、ともに七反余（約七千平方メートル）の土地を反田に所有しており、孫左衛門も四反余（約四千平方メートル）の土地を所有していた。そのため、再三にわたり反田減免願を提出していたが陣屋側はこれを受理しなかった。さらに浅間山の噴火や旱魃が重なり、要求が過激化していく。

一七五四（宝暦４）年九月八日、孫左衛門に指示された百姓代三人が村役元に対し「反田減免願」「畑不作引願」の取り次ぎを要求し、一連の騒動が始まった。その後、新海神社の森などで寄合をくり返した孫左衛門や小百姓らは、「新海明神領願」を加えた三本の「願」を村役元から郡代深津源太夫に提出させた。

郡代深津がこの「願」を受け付けないまま一〇月二四日藩主松平乗穏の婚礼のため出府すると、その夜源蔵らを先頭に田野口村の小百姓らは江戸に出訴し、これに各村の小百姓らも続いた。江戸出訴の田野口村小百姓は七八人（一説に八五人）とされる。

江戸の公事宿（訴訟人の宿泊する宿）の仲介で、「願」は江戸屋敷の役人を派遣したうえで聞き届けることとなったが、その後も陣屋側と百姓らの対立は続き、陣屋役人の悪行を書き連ねたいわゆる「箱訴状」が投げ込まれもした。

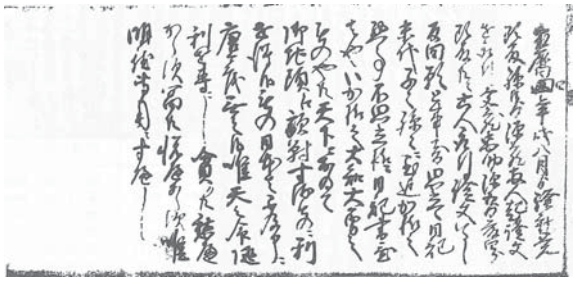
一一月一八日、孫左衛門らは改めて八カ条の願を作り陣屋へ提出する。郡代深津らが江戸に伺いをたて戻

ってくると、一七カ村の百姓ら三五〇〇人が集結し回答を待った。しかし、回答は百姓側には受け入れがたいものであったことから、一二月一六日小百姓らは江戸へ再出訴する構えをとり岩村田宿まで押し出した。これに陣屋側が態度を硬化させたため、孫左衛門らは請書を作り詫びを入れた。結局、二五日までに騒動参加の一七カ村全てが請書を提出し、事態は収束した。

●中心人物の吟味と処罰

江戸出訴を源蔵らに委ねた孫左衛門は、陣屋からの江戸出訴者数の尋ねに対し、江戸出訴の小百姓名を帳面にして提出し、「江戸に出かけるにあたって名主年寄に届け出た者はひとりもいない」と回答し、小百姓らとの関係を表だって認めてはいない。

一時謹慎させられていた孫左衛門は、小百姓らの吟味中止要求によって直ちに釈放された。その後各村が請書を提出したこともあって騒動は一応鎮静化したかのようにみえたが、翌年から始まった主導者の糾明は厳しさを極めた。



高橋善之丞が記した「騒動覚」の前書部分
（田口 高橋紹夫氏蔵）

孫左衛門・源蔵らは書類の焼き捨てなどの証拠隠滅を図ったが、孫左衛門と源蔵が取り交わした江戸出訴に関わる証文が明らかにされ、さらに騒動関係者の証言から孫左衛門が中心人物と断定された。

続いて田野口村百姓との対決の中で、孫左衛門による領内各村への騒動参加の働きかけなども明らかとなり、最終的に全責任を孫左衛門が背負いこむかたちとなった。

一七五六（宝暦6）年六月二〇日、牢に入れられていた孫左衛門らに対し、処罰が申し渡された。

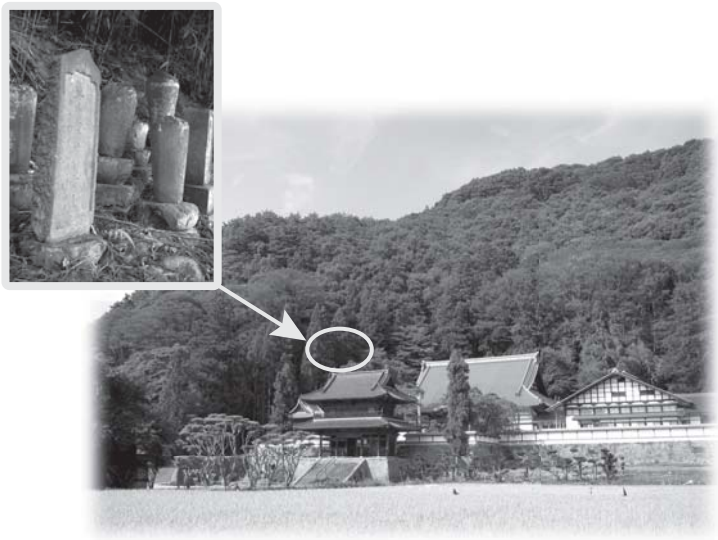
孫左衛門ひとりが打ち首・跡式闕所（田畑・屋敷・家財等の没収）となり、源蔵・忠助・源五右衛門らは追放、そのほか騒動に関係した年寄、百姓代らは手錠などの刑となっている。

その三日後、孫左衛門は処刑された。割元を勤めるだけあって、田畑合わせ三町三反四畝余（約三・三ヘクタール）・持高三三石八斗余を所有する富農ではあったが、その家財はたいへん質素であった。また、子どもはなかったため、家は途絶えている。

この騒動は、もともと反田地籍に多くの土地を所有し高い年貢に不満を抱いていた源蔵・忠助・源五右衛門らとともに、孫左衛門が藩側に年貢減免を強く願い出たことが発端であった。領内小百姓らの年貢収奪への不満と自らの減免要求を結び付け、仲間を集め役所に対抗したものの、領内二五カ村にまで広げることはできなかった。

騒動により多くの処罰者を出したが、反田地籍の年貢引き方がわずかながら認められるようになった。

（大塚尚三）



蕃松院に残る孫左衛門墓碑「一翁良無居士」
能満寺歴代住職の墓と並び葬られている。

参考文献

市川武治『田野口藩歴史年表』櫟
市川武治『佐久の騒動と一揆』櫟
南佐久郡誌編纂委員会『南佐久郡誌』南佐久郡誌刊行会
臼田町誌編纂委員会『臼田町誌』佐久市臼田町誌刊行会

佐久の先人たち⑳㉑

日本で初めてカラマツ育苗を成功させた

松本谷吉（まつもとたにきち）・清水清吉（しみずせいきち）

（1836～1923年）　（1848～1902年）

荒れた山林に緑を取り戻そう、カラマツは成長も早く、建築・橋梁・坑木など用途も広い。農業と行商で暮らしていた二人は、この苗を生産して植林に役立てたいと考え、日本で初めて種子からのカラマツ育苗を成功させ、世界の緑化に大きく貢献した。

●火薬商で各地を歩いていた二人

現存するわが国最古のカラマツ人工林は、小諸藩が江戸時代嘉永年間に浅間山麓南ヶ原で造林したものである。ただ、この時植林に用いた苗木は自生の山抜苗（やまぬきなえ）で、大きな面積での植林に応じることは出来なかった。

大谷地村（現佐久市協和）の松本谷吉は一八三六（天保7）年生まれ、小平村（現佐久市協和）清水清吉は一八四八（嘉永元）年生まれだから、明治という時代を迎えた時、谷吉は三二歳、清吉は二〇歳であった。二人は火薬の行商を生業として村々を回っていたが、その商売は先細りであった。そこで彼らは新しい商いとして、荒れた山林にカラマツを植えるということに着目し、自生の山抜苗を火薬といっしょに売り歩いたところ、仕入れ値の二倍で売れた。しかし、山抜苗は数に限りがあり、計画的な需要に応えることができない。なんとか種子から苗を育てることは出来ないか。しかし、これは我が国において、今まで誰もやったことがない事業であった。

●カラマツの種子から育苗に成功

カラマツの母樹（天然落葉松（てんから））は、長野県を中心に本州中央高地に集中している。カラマツは実をたくさんつける年とほとんどつけない年があり、採種は難しかったのだが、一八七四（明治7）年は、蓼科山のカラマツが豊かに実をつけた。二人はその種子を集め、翌年にそれを畑に播いた。しかし育苗の方法もわからず、稗（ひえ）・粟（あわ）と同じように播いたので、発芽はしても枯れたものが多く、わずかな苗しかできなかった。

一八七六（明治9）年には、二通りの育苗を試みた。一つは苗代田のように肥料を施し、配水して乾かしてから種子を播いたが、これは失敗に終わった。もう一つの方法は畑に播いた。赤松の枝を挿して日除けをし、この方法で不完全ながら苗木を得ることができた。これが、育苗による苗木販売の記念すべき第一歩となった。翌年はまた種子が豊作だったので、二人は育苗方法を伝授しながら種子を行商した。

一八七七（明治10）年に起きた西南の役の後、世の中は好況となり、植林に対する意欲も高まった。二人は南佐久郡川上村、諏訪郡泉野村（現茅野市）、浅間山麓などへ種子採種に出掛け、苗木養成は地元だけでなく、北安曇郡常盤村（現大町市）、東筑摩郡山形村、波田村・今井村（現松本市）まで事業を広げた。長野県もカラマツの有用性を認め、植林を奨励した。県庁の薦めを受けて植林に取り組んだ大沢村（現佐久市）は全国一の模範林と言われたが、これも二人の影響があったと記されている。

●松方デフレで育苗業は挫折

一八八二（明治15）年、大蔵卿松方正義（まつかたまさよし）はインフレを抑えるため、緊縮財政を実施した。政府は資金調達のため、官営工場を民間に払い

カラマツ苗の育苗（右が一年生、左が二年生）
川上村

大谷地でカラマツ苗の選別
（昭和30年　市川金政氏蔵）

下げ、増税し、政府予算を縮小したので、国家財政は再建の方向に進んだが、繭や米など農産物価格は下落し、小作農の増加、農地売却など農村の困窮が広がった。いわゆる「松方デフレ」である。官民共に植樹造林に対する関心は失われ、二人の事業も厳しい状況を迎えた。例えば、常盤村から四石五斗の種子の注文を受け、一升の単価一円で貸売りしたが、翌年、代金の回収が不可能になり、代償として、一年生幼苗を受け取り、自村などに移植するということもあった。二人は事業を広げていたこともあって、この不況に勝てず、カラマツ種苗業は挫折した。

●二人の後を継いだ人たちが苗を世界へ

不況が終息した一八八六（明治19）年、二人の後を継いで協和村の上野喜之助、若い頃協和小学校の教員であり、やがて川上村に戻った井出喜重らによって、カラマツ苗の育苗と販路拡張が進められた。上野は一八八七（明治20）年、岩手県遠野へカラマツ苗六〇万本を出荷している。明治27～28年ごろになると、北海道・朝鮮方面へ、明治37年には樺太・満州へ、そして第一次世界大戦後はヨーロッパにまで販路を広げていった。協和村では多くの農家が苗木生産などに関わるようになり、一九一九（大正8）年には協和村に「北佐久林業種苗共同販売組合」が組織された。この組合には、谷吉の息子松本卯八（後の協和村長）も加わっていた。

谷吉・清吉の二人は、事業では挫折したが、全国で初めて成功させたカラマツ苗育苗という技術は、やがて日本各地、そして世界の山々に美しい緑をもたらしたのであった。

●白秋の詩を生んだ松本・清水の技術

作家井出孫六は『新・千曲川のスケッチ』の中で次のように記している。

「島崎藤村が小諸義塾にやってくるのは明治三十二（一八九九）年のこと、六年間の滞在中、藤村は千曲川の畔（ほと）りを歩いてスケッチをのこしたが、まだ彼の目にからまつ林の美しさが入ってこなかったのは当然なことだ。千曲川流域、佐久地方の風景が、からまつによって一変するまでにはいましばらくの時間が必要だった。（中略）

詩人北原白秋が義弟山本鼎のかかわっていた信州自由画教育運動の夏期講習に招かれて、はじめて信州にやってきたのは大正十（一九二一）年八月のことだ。沓掛（くつかけ）の星野温泉に泊まった九州・柳川生まれの詩人は翌朝、これまで見たこともない美しい針葉樹の林がどこまでもつづいているのを目にして心を動かされた。

からまつの林を出でて、からまつの林に入りぬ。
からまつの林に入りて、また細くみちはつづけり。

その年の十一月、『明星』に白秋の『落葉松（からまつ）』は載った。」

北原白秋「落葉松」の碑。詩は大正10年、菊子夫人と星野温泉に滞在中つくられたものだという。（軽井沢町・星野温泉入口）

谷吉・清吉両人の作り出した新しい技術が、『落葉松』という白秋の詩を生（うた）んだのだった。

（清水宣子・吉川徹）

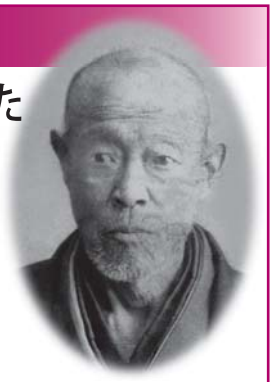
・・・

佐久の先人たち㉒

明治政府に尺度統一を建白した

市川又三

（1838～1909年）



明治のはじめ、市川又三はこれまでばらばらだった尺度を統一するため、私財を投じて再三にわたり政府へ建白書を提出した。こうした行動は後の「度量衡取締条例」や「度量衡法」制定へとつながることとなった。

●明治政府の政治方針

市川又右衛門こと又三は一八三八（天保9）年、佐久郡岩村田（現佐久市岩村田）に又右衛門こと又三郎とあいの間に四人兄弟の長男として生まれた。

一八六八（慶應3）年、又三が三〇歳になる頃、明治新政府は王政復古の大号令のなかで、古くからのしきたりを変えるため、言論の道を開き国民の声を取り入れるので、身分にこだわらず、進んで政府に意見を出して欲しいという姿勢を示した。

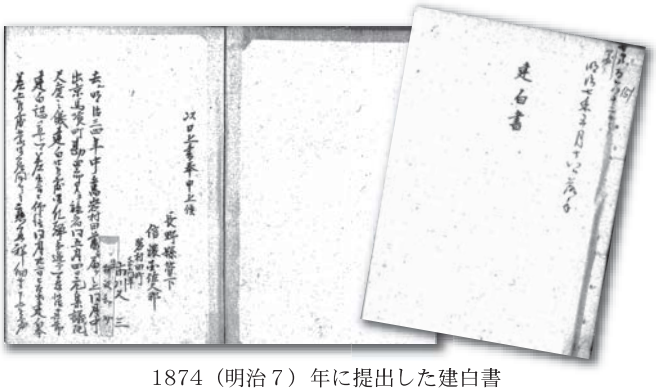
こうした方針に深く感激した志ある人々は、政府に意見を申し立てる建白書を提出するため、家業をなげうって東京に出ていった。又三もその一人であった。

●建白書提出の経過

又三には、小諸の大きな呉服問屋の養子となった弟がいた。その弟から地方によって尺度（寸法）がばらばらで統一されていないので、商売に苦労しているという話をよく聞かされていた。

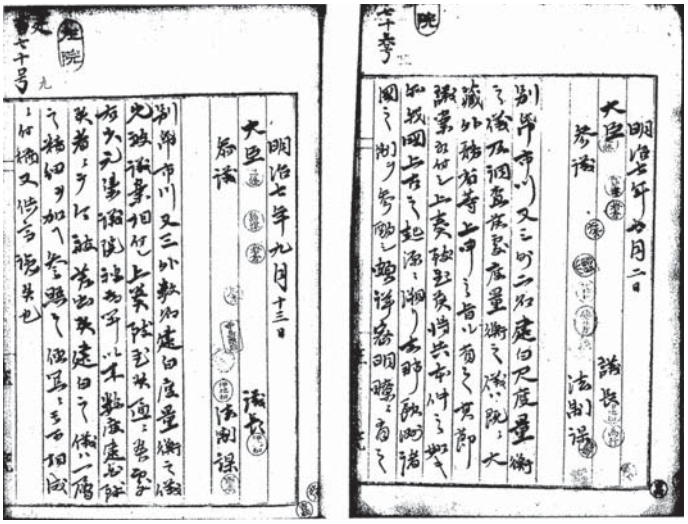
広く国民の声を取り入れようとする政府の方針に共感していた又三は、尺度統一の建白を思いたった。

根々井塚原村（現佐久市）や追分村（現軽井沢町）等の仲間数人と、一八七〇（明治3）年に二回、その後健康を害しての中断があったが、一八七三（明治6）年とその翌年にもそれぞれ二回上京し、政府左院に建白書を提出した。



1874（明治7）年に提出した建白書
（国立公文書館蔵）

その都度、県権参事（ごんのさんじ）の添書の外に尺度の目論見・仕法書等を新たに書き直し、正副二通の建白書を繰返し提出している。



又三の建白書を政府内で閲覧したことを示す書類。
大臣（三条実美、島津久光、岩倉具視）、参議らの押印が見られる
（国立公文書館蔵）

この頃は長野と東京を結ぶ鉄道が無かったので、片道五、六日もかけて泊りがけで上京していた。また、建白書を提出した後も呼び出しがあり、時には一ヶ月も旅館で待機しなければならなかった。

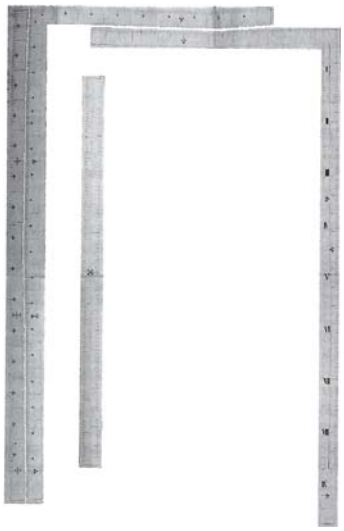
●尺度統一の目的

又三が一八七四（明治7）年八月に明治政府に提出した建白書「尺度の再議」にはその目的として「地租改正条例が出されて、宅地・田畑・山林等の実地検査が開始された。これは画期的な大事業である

が、実地検査の基本は尺度にあり、まず尺度を正さなくては面積の精確な測定は保証できない。村々の規模では差が小さくても、県的な規模では一郷一村の差になりかねないだろう」と述べ、さらに

「尺度量衡の制度は近代国家には欠かせないもので、もしこの制度が無ければ、私欲を満たそうとする商人のために、良民はますます損害をこうむる事は必定である。これは文明の世にあるまじきことで、国はまず第一に尺度を確定し、人民が安心して職に従事し生活できるようにすべきと考える…」と進言している。

さらに又三は、尺度の統一を訴えるばかりでなく、中国の古今五〇種類の尺度を比較図示し、また西洋各国の単位も調べ上げて百種類にも及ぶ単位を列挙し、



又三が提言した曲尺および帯衣尺（鯨尺）
・呉服尺の雛形と、在来の曲尺との比較図

遂には適当と考える「一尺」の長さを確定するまでに至った。

又三は「天下の重器」である尺度の統一こそが国のためとなる最緊急課題であると考えていた。さらに単なる民ではなく、政府に意見を述べることができるという国家の構成員として認められた喜び、それが又三たちの献身的な行動の支えになっていた。

明治政府は一八七五（明治8）年「度量衡取締条例」、そして一八九一（明治24）年に「度量衡法」を公布し、ようやく尺度が全国で統一されることとなった。その成立には又三の「尺度之議」建白が大きな影響を与えていた。

●又三のその後

又三は建白のため頻繁（ひんぱん）に上京し、長い間家を空け、多くの金銭を費やしたので、妻は実家へ帰ってしまっていた。そのため、市川家の家督は弟に譲り、自らは妻の後を追って野沢に移り住んだ。

このような国家的事業に関わる活動を行っていたにもかかわらず、又三は建白活動の内容について親戚は勿論、家族にも知らせていなかったため、室町時代から続く裕福な市川家の家計が傾いた原因は、又三が相場で失敗したためだと、子孫には伝えられていた。

又三の建白活動から百年以上経った一九八六（昭和61）年、当時東京経済大学で日本の近代史を研究していた牧原憲夫助教授が、野沢に住む又三の末裔（まつえい）を訪ねたことから、ようやくその業績が明らかとなった。

これにより又三は、世のために私財を投じて建白書を提出し、国の方針に影響を与えるような偉業に取り組んでいたことが、ようやく人々に知られるようになったのであった。

市川家に伝わる曲尺と矢立
（筆と墨壺を組み合わせた携帯用の筆記具）

（市川悦雄）

参考文献
牧原憲夫『明治七年の大論争』日本経済評論社

佐久の先人たち㉓

塾を開いて漢詩文を教えた先生

依田稼堂

（1851～1914年）

東京で漢詩文を学んで帰った稼堂は、友人たちと学びあいながら、多数の漢詩文を作った。また佐久の野沢・岩村田・前山・桜井などで塾を開いて、１０００人を超す人々に漢詩文を教えた。

●漢詩文を学ぶ

依田稼堂は一八五一（嘉永４）年、佐久郡五郎兵衛新田村（現佐久市甲）に、依田源四郎・みねの子として生まれた。依田家は、裕福な農家で、父の源四郎は幕末には地域の「取締役」を務め、明治初期には「戸長」を務めた地域の有力者であった。稼堂は号で、名は喜信、通称は七太郎。順甫とも号した。

七太郎は、下県村（現佐久市下県）の木内芳軒から漢詩文を学んだ後、廃藩置県が行われた一八七一（明治４）年に上京し、浅草の鱸松塘塾で漢詩文を学んだ。鱸（本姓鈴木）松塘は、大沼沈山・小野湖山とともに「明治の三詩人」と称された人物で、佐久からは、野沢村（現佐久市野沢）の並木梅源（衛七）・和一父子も、松塘塾に学んでいる。稼堂は小野湖山とも親しく、その交流は終生続いた。稼堂は、当時一流の漢学者・漢詩人から漢詩文を学んだのである。

帰郷した稼堂は、一八七三（明治６）年に長野県講習所より「三等訓導仮免状」を与えられ、五郎兵衛新田村の右文学校に教員として勤務した。しかし、漢詩文をもっと学びたいという希望を強く持っていて、翌年に再び上京し、松塘塾の塾頭（塾長）となって勉強を続けた。

そして、一八七六（明治９）年には大谷元知と、藤田東湖・佐久間象山ら著名人二四人の文章を収録した『文章奇観』全三巻を編集・発行した。

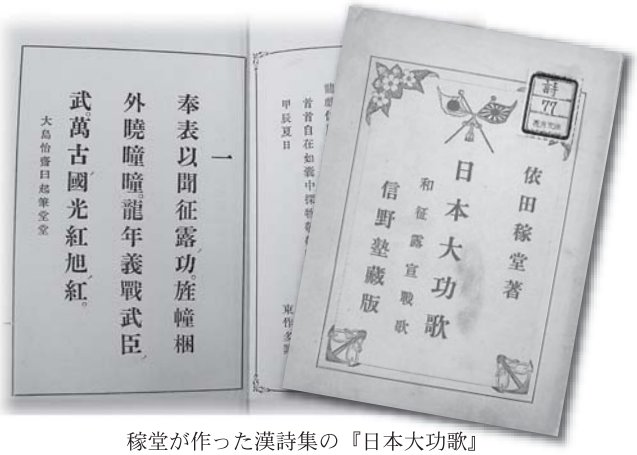
野沢の本覚寺
稼堂はここで有隣塾を開いた。

●塾を開いて

そのようにして滞在を続ける稼堂へ、父源四郎らから帰郷を促す手紙がたびたび寄せられた。その結果稼堂は、西南戦争が起こった一八七七（明治10）年に帰郷する。それから三年ほど、南北佐久郡の有志の招きに応じて各地で漢詩文を教えた後、一八八〇（明治13）年に野沢村で私塾・有隣塾を開いた。

その後稼堂は、一八九八（明治31）年に有隣塾を岩村田町（現佐久市岩村田）に移し、さらに前山村（現佐久市前山）・桜井村（現佐久市桜井）でも塾を開いて漢詩文を教えた。教え子は、南北佐久郡を中心に一〇〇〇人を超したといわれている。

なお、一九〇四（明治37）年には、日露戦争について詠んだ三〇首の漢詩を収めた『日本大功歌』を出版し



稼堂が作った漢詩集の『日本大功歌』
（上田市立図書館花月文庫蔵）

ている。これには、書家として知られる日下部鳴鶴（東作）・巖谷一六が詩文を寄せている。

一九一一（明治44）年に還暦を迎え、多くの教え子らに祝ってもらった稼堂は、翌年佐久を離れ、子の源七（当時は長野県庁に勤務）が住む長野市へ転居した。明治から大正へと元号が変わったその年の一二月には、上水内郡組合立東部農学校（現長野吉田高校）の教授を嘱託されている。しかし、それから一年余り後の一九一四（大正3）年一月二一日に死去する。行年六十四歳であった。

佐久市甲にある稼堂の墓。正面に「稼堂喜信居士」と刻まれている。

●友人・教え子たち

稼堂の作品や関係文書は、依田昂家文書・依田房一家文書として伝えられている。それらを見ると、稼堂がもっとも親しく交際したのは並木梅源だったと思われる。梅源は、野沢の通称「やなば」の大地主で、一八八五（明治18）年に子の和一に家督を譲ってからは、漢詩や謡曲などの趣味に生きた人物だった。

依田家文書には、梅源の漢詩や書などが多数含まれている。ほかに貞祥寺中興の開山と称せられる鈴木頑石（正光）、長野県師範学校（現信州大学教育学部）を卒業し、岩村田町近在の小学校に勤務しながら文部省の中等学校教員試験検定（文検）に合格して国語・漢文科の免許をえた山室春蚓（茂次郎。別号藤城）らとも親しく交際した。山室は石版画家の岡村政子の弟で、文学者山室静の父にあたる。

一八八八（明治21）年には、そうした人々と漢詩集『嚶々吟社詩』を発行している。自ら漢詩を作るとともに、切磋琢磨しあっていたのである。

教え子には、並木梅源の子で、稼堂の有隣塾で学んだ後、松塘塾・旧制松本中学（現松本深志高校）で学び、長野県会議員、貴族院議員などを務めた和一がいる。並木家では、親子で稼堂と交わったことになる。

また、書家として大成する比田井天来（常太郎、鴻）もいる。天来は、稼堂を生涯師と仰ぎ、折あるごとに稼堂へ手紙を寄せている。それらも依田昂家文書に含まれている。ほかに医師・郡会議員として活躍した柳沢豊助（杏堂）、教師となり『百蟲詠』などの漢詩集を出版した臼田桜邨（壽惠吉）らもいる。

ところで、桜井村で開かれた有隣塾は、桜井村の青年たちが稼堂に頼んで自発的に開いた塾だった。その塾の規則（塾則）では、貧困で月謝などを払えない人には、月謝などを免除するとしている。地域の青年たちのともに学びたいという強い意欲がうかがえる。

稼堂は、自ら漢詩文を学ぶとともに、こうした勉強したいという強い意欲を持った少年・青年たちの希望に応じて、各地で漢詩文を教え、多数の有為な人材を育てたのである。

（斎藤洋一）

有隣塾の「入塾人名録」
冒頭に並木和一の名前がある。
（依田昂家文書）

参考文献

依田昂家文書・依田房一家文書（五郎兵衛記念館蔵）

佐久市教育委員会『五郎兵衛新田古文書目録　第八集』　佐久市教育委員会

佐久市志編纂委員会『佐久市志』佐久市志刊行会

佐久の先人たち㉔

明治の先端を生きた石版画家

岡村政子（おかむらまさこ）

（1858～1936年）

明治初期に佐久から上京した政子は、正教会の女学校に寄宿しながら、日本初の公立美術学校であった工部美術学校の一期生として洋画を学んだ。その後、夫の岡村竹四郎とともに石版印刷会社信陽堂を起こし、数々の石版画を世に送り出した。

●政子の生まれた時代

岡村（旧姓山室）政子は、明治維新の一〇年前となる一八五八（安政五）年一〇月一五日、父・岩村田藩士山室直高と母・さだの娘として江戸に生まれた。文学者の山室静は政子の甥にあたる。

政子誕生の前年には、ともに美術学校で洋画を学んだ後、ロシアに留学してイコン（聖像）画家となる山下りんが常陸国笠間（現茨城県笠間市）で、三年後には政子の生涯の伴侶となる岡村竹四郎が、佐久郡高瀬村（現佐久市高瀬）でそれぞれ生まれている。

時代は、日本が長く続いた鎖国を解き、西欧の文物を取り入れて近代国家になろうとする激動期に入ろうとしていた。

●上京して工部美術学校へ

時代が江戸から明治に移った頃、政子は家族とともに父の郷里岩村田へと引き上げたことから、少女期を佐久で過ごすこととなる。

一六歳となった政子は、新たな生活を切り開いて行く決心を固め、姉の嫁ぎ先を頼りに上京する。東京へ向かう鉄道もまだ無い時代に、女性ひとりで上京するのは、よほど強い動機付けと勇気が必要なことだったと思われる。

かつて岩村田藩邸のあった神田明神下からほど近い神田駿河台に、ロシア正教会の宣教師ニコライが宣教本部を設置したのは一八七二（明治5）年のことであった。その後、正教女子学校、正教神学校が設立されたが、政子は上京後間もなくしてこの寄宿制女子学校に入学し、やがて洗礼を受ける。

ニコライは日本宣教団設立準備のため一時帰国した際、ロシアから石版印刷機を携えて戻り、自ら布教に必要な文書類を印刷していた。ニコライは石版印刷の手ほどきをした政子に画才を認め、一八七六（明治9）年に開校した工部省工学寮美術学校（工部美術学校）に第一期生として入学させた。

ニコライは、政子が日本各地に設立される教会のイコンを描く画家になることを期待していたようである。政子は月謝二円の学費と食費は負担してもらっていたが小遣い銭はなかったので、片方ずつ拾った下駄に緒をすげ替え、学校に通ったと言われている。

工部省は明治初期の殖産興業政策を推進した政府の中枢機関で、近代技術を移植するため欧米各国から多数の技術者（お雇い外国人）を招いて人材の養成に当たらせていた。美術学校でも画家のフォンタネージ、彫刻家のラグーザ、建築家のカペレッティがイタリアから招かれた。これら教師による西洋美術の組織的指導は、日本で初めてのものであった。

フォンタネージ送別会記念写真　1878（明治11）年
後列左から２人目が政子、その右がフォンタネージ
『岡村政子伝』所収

政子の同期となる生徒には、後に明治期の洋画の代表的作家となる浅井忠、小山正太郎、松岡寿、山本芳翠、五姓田義松らがいた。また、女生徒には政子のほか山下りん、神中糸子、川路はな子ら六人の生徒がいた。その後りんは、政子に誘われ正教会に入信する。

フォンタネージの契約期間は三年であったが、健康上の理由と、西南戦争後の財政難により、希望していた新たな校舎建築の実現が難しくなったこともあり、一八七八（明治11）年九月に辞職し、帰国してしまう。しかし後任の教師が能力も品性もない人物であったため、生徒たち十数人が抗議し退校する事態（連袂退校事件）へと発展する。この中に政子も含まれていた。

●石版印刷会社信陽堂

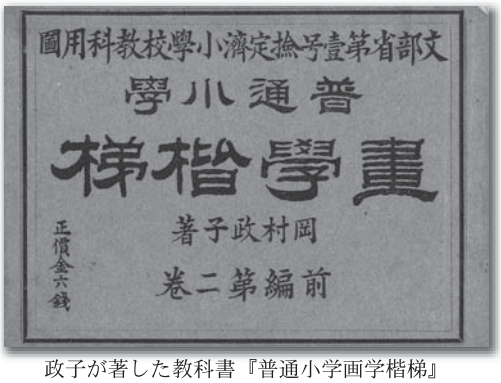
美術学校を退校した政子は、一八八〇（明治13）年九月一六日、慶應義塾の福沢諭吉のもとで学んだ岡村竹四郎と結婚入籍し、この年長女を出産する。ニコライは政子をイコン修行のためロシアに留学させようとしていたが、政子が結婚してしまったため、代わりとして急遽りんが派遣されることになった。

ロシアに向け、りんを乗せた船が横浜を出港した二年後の一八八二（明治15）年、竹四郎と政子は東京府京橋区加賀町一番地（現東京都中央区銀座）に信陽堂石版印刷所を創業した。

政子は竹四郎を助け、作画と製版を行った。二人の努力に加え、ニコライや福沢諭吉らの援助にも支えられた信陽堂は、福沢の創刊した日刊紙『時事新報』付録や、歴史画・風俗画・肖像画など、多くの多色刷り石版画を発行し、業績を伸ばしていった。

一八八五（明治18）年には文部省第一号検定済み教科書『普通小学画学階梯』、その三年後には『新撰画学入門』を出版し、政子が手本となる絵を描いている。

また、一八九一（明治24）年には、明治天皇・皇后の肖像を献上し、これを印刷して頒布する許可を得て、成功を収めた。



政子が著した教科書『普通小学画学階梯』

信陽堂は業務拡張に伴い、一九〇六（明治39）年同業三社と合併して東洋印刷株式会社となり、竹四郎は専務取締役に就任するが、政子はこの頃には経営を助け絵筆をとらなくなっていた。

東洋印刷は順調に発展していったが、一九二三（大正12）年九月一日の関東大震災によって大損害を受け、数年後に解散することとなってしまう。また、この災害により東京芝の自宅に所蔵されていた政子の肉筆を含む作品や、資料のほとんどを焼失してしまった。

岡村政子画　時事新報五千号付録
1897（明治30）年　多色石版
佐久市立近代美術館蔵

残された作品は少ないが、明治初期の混乱した時代に単身上京して西洋美術を学び、日本の初期石版画史上に大きな役割を果した政子は一九三六（昭和11）年一二月三〇日、竹四郎はその三年後に死去した。共に七八歳であった。

（小山雅比古）

・・・

佐久の先人たち㉕

信州財界の救世主

瀬下（せじも） 清（きよし）

（1874～1938年）

三菱の会長でありながら、その生涯を“銀行小僧”で通した金融マン。昭和恐慌で危機にひんした信州二大銀行を統合、「八十二銀行」として誕生させた功績は、信州経済史に不滅の光を放っている。

●蔵相の発言で取り付け騒ぎ

瀬下清は、三塚村（現佐久市三塚）の出身で、家は代々名主をつとめ、旧藩時代は龍岡藩一の大地主だった。六歳のとき分家の養子となり上京した瀬下は、東京神田一ツ橋の東京高等商業学校付属主計学校を一八九三（明治26）年に卒業した。ここは後に東京商大に昇格、戦後は発祥の地名をとって一橋大学となった。

はじめ百十九国立銀行に勤めた瀬下は、二年後に三菱合資会社銀行部に移った。当時の彼は毎朝、弁当を二つ持って出勤した。一つは昼に銀行で食べ、夜は銀行から夜学に直行、ここで二つ目を食べていた。

銀行家の彼が、大器の片りんをみせたのは神戸支店長時代であった。当時、経営不振のうえに金融難で困っていた灘の酒造会社「桜正宗」に、破格の融資をして立ち直らせた。企業に誠実と熱意があれば、彼はどこまでも面倒をみた。それが銀行家のつとめ、と心得ていた。だが誠実と熱意に欠ける企業には、たとえ業績がよくても、冷淡だった。

日露戦争の勝利とともに、わが国の国威はめざましく伸びた。地方にも鉄道が敷設され、商品の流通から地方産業の台頭となった。長野県でも製糸業が大きく発展し、金融機関も各地に誕生した。大正のはじめには、普通銀行が一一六行もあったという。

一九一九（大正8）年、三菱合資会社銀行部は「三菱銀行」として分離独立、これとともに瀬下は常務に昇格した。以来一五年間にわたってその職にあり、今日の基礎を築いた。

一九二七（昭和2）年三月、折から開会中の衆議院本会議で、片岡直温（なおはる）蔵相が不用意にも「銀行の経営が危機にひんしている」と発言した。これが引き金となって、その日のうちに、全国の各銀行には預金者が殺到し、預金引き出しの取り付け騒ぎとなった。この蔵相発言で破産した銀行は、全国で二八行にも及んだ。

●瀬下の演説で危機救う

東京中野銀行も同様で、銀行には預金者の長い列が続き、みんな預金の引き出しにかかった。この時瀬下はトラックに大金を積んでかけつけ、行列の群衆に叫んだ。

「私は三菱銀行の瀬下です。中野銀行には三菱が控えています。みなさんのお金は、この三菱が保証します。絶対大丈夫、あわてないでください」

ツルのようにやせた瀬下だが、その演説には迫力があった。取り付け騒ぎは水を引いて、東京中野銀行は危機を脱した。

預金引き出しのため東京中野銀行に殺到した預金者
『日本の百年・写真で見る風俗文化史』毎日新聞社編
左上は三菱銀行本店（日本建築学会図書館蔵）

長野県内の銀行では、蔵相失言による取り付け騒ぎはなかったものの、昭和恐慌による業績不振で、各銀行とも預金の減少が目立った。これとは逆に貸し出し金は増えた。そこで政府は中小銀行の合併を呼びかけ、これにこたえて県内でも「信濃銀行」が誕生した。

だが、スタートしたものの、信濃銀行の前途は難関続きだった。合併時の不良債権引継ぎの不手際に加え、繭価暴落によって、支払い停止に追い込められ、破たんという事態となった。

この結果は当然のことながら、県内の十九銀行、六十三銀行にも大きな影響を与えた。半年後には両行とも、預金量は半減という厳しい結果が出た。

この事態に両行幹部はひそかに東京で協議した。その結果、両行は親銀行だった三菱銀行瀬下の仲介で一九三一（昭和6）年八月一日に合併した。新行名は両行の数合わせで「八十二銀行」となった。これによって長野県の金融危機はほぼ解消され、瀬下は「信州財界の救世主」としてその名を残した。

上田市にあった第十九銀行（左）と長野市にあった六十三銀行（右）
『八十二銀行五十年史』所収

●日銀総裁を断る

瀬下は信州人らしい、気骨ある人でもあった。広田弘毅内閣が総辞職したとき、これに殉じて深井英五日銀総裁も辞任した。その後任選考のとき、財界からは三菱銀行会長の瀬下を推す声が強かった。これを聞いた瀬下は

「オレは学問はないし、銀行小僧だ。三菱を死に場所にしているのに、余計なことをするな」

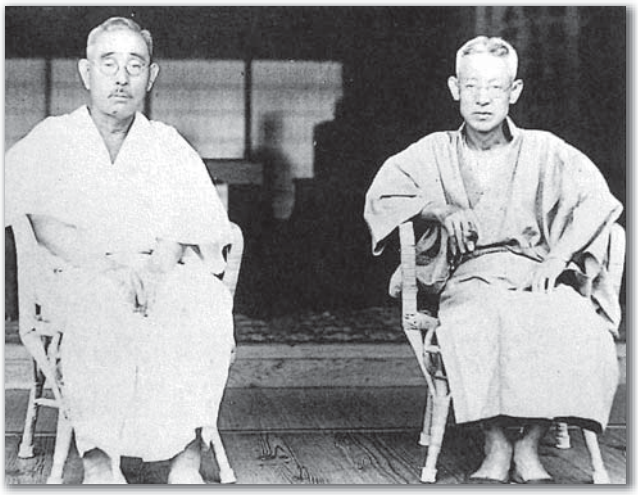
とカンカンに怒った。

そうした「頑固」さのある反面、郷里の青年たちのためにと、生家に近い野沢中学（現野沢北高校）には大学並みの化学実験室、佐久市前山の貞祥寺には図書館をそれぞれ寄付している。さらに「信越線御代田駅の待合室には暖房施設がない。何とかしてくれ！」という新聞の投書をみて、匿名で金を送り、ストーブが設置されたということもあった。

瀬下は一九三八（昭和13）年三月まで三菱銀行会長をつとめたが、病いが重くなったので辞任、その半年後に亡くなった。彼の死を惜しむ追悼記事は次のように報じた。

「……異論のように見えても、いつも実地と経験と勉強を教える常道を、一歩も踏みはずしていなかった」

（中村勝実）



同郷の神津藤平（左）と志賀高原で談笑する瀬下（右）
『信州人物風土記・近代を拓く第12巻
観光信州・信念の先覚者　神津藤平』所収

参考文献
中村勝実『近代佐久を開いた人たち』櫟

佐久の先人たち㉖

小海線全通に生涯をかけた政治家

篠原和市（しのはら わいち）

（1881～1930年）

一介の新聞記者ながら、小海線全通期成同盟委員長になり、その生涯を小海線にささげた政治家。だが、全通を前に急死、晴れの祝賀会では小海線全通功労者として、その名を呼べども彼の姿はなかった。

●政界の大物、小川の現地踏査

篠原は伴野村（現佐久市伴野）の出身。青春時代は、島崎藤村が教べんを執っていた小諸義塾で学んだ。藤村が名作『破戒』の執筆を終え、その原稿をたずさえて上京したとき、篠原もまた、後を追うように東京へ出た。日本大学を卒業後、東京日日新聞社（現毎日新聞社）に入社、政治部記者となった。

当時、佐久鉄道は小諸―中込間についで、小海まで開通したが、当初は順調だった経営も、第一次世界大戦後の不況で経営は傾き、計画していた小淵沢までの延長は絶望的となった。

そこで佐久鉄道を鉄道省に移管し、小海―小淵沢間は省線として建設しようと地元で計画され、その全通期成同盟会が東京で開かれた。たまたまその取材に訪れた篠原が、情報通で鉄道当局にも顔がきく、というところから委員長に推されてしまった。

当時の政界では、政友会が地方にくまなく鉄道を建設し、改良はその次という「建主改従（けんしゅかいじゅう）」政策。これに対し憲政会は建設よりレール幅を広くして、電化するなど改良を主にし、建設はその次という「改主建従（かいしゅけんじゅう）」主義だった。そこで篠原は長野県出身の政友会の重鎮、小川平吉を動かし、予定線の小海―小淵沢間を馬で踏査、それによって世論を高め、建設に結びつけようと計画した。

現地踏査は一九二二（大正11）年八月二日に行われた。この日小川は、日覆いのゴザを背に麦わら帽、巻脚絆（まきぎゃはん）といういでたち。同行者は三十頭の馬とともに、小淵沢から小海へ向かった。新聞記者も同行した。

騎馬パレードが野辺山まで進んだところ、長野県側の大歓迎陣に迎えられた。それが余りにも多かったので、馬もびっくりして暴走、小川は落馬してしまった。ケガはなかったものの、「大政治家の落馬」という思わぬニュースが、翌日の紙面におどった。小海・小淵沢線は一躍、世間に知れわたった。

当時全国では一四九の予定路線が工事線参入をめぐって、激しい争いを展開していた。篠原は「新聞記者兼期成同盟委員長」という〝両刀使い〟で鉄道省へ足を運び、大臣の取材が終わると、すぐに陳情に早変わり。その回数は百回余りに及んだという。そこで大木遠吉（おおきえんきち）鉄道相も「あれは篠原鉄道だ」とニガ笑い。

中込の成知公園内にC56蒸気機関車とともに保存されているガソリンカー。篠原が世を去った年に導入され、小海線全通後も走り続けたが、戦時体制下の燃料不足により運行が廃止された。

●一一票差で激戦制す

こうした運動が功を奏し、小海・小淵沢線は「小海線」と命名され、一九二三（大正12）年には工事が始まった。だが、関東大震災や、鉄道建設に消極的な憲政会政権の誕生などで、翌年には工事は中止となった。

こうなると、あとは政治の力で解決するより方法はなかった。たまたま南北佐久を選挙区とする衆議院長野九区では、代議士の岡部次郎が病死したため、一九二五（大正14）年に補欠選挙をすることになった。チャンス到来とばかり、篠原は政友会から出馬、憲政会の中山武三郎と争うことになった。

二人はともに南佐久の出身。中山が佐久の名家の生まれに対し、篠原は新聞記者出身。資金力では大きな差があった。このため「金権候補か、清貧候補か」といったビラさえ乱れとび、激しい選挙戦となった。

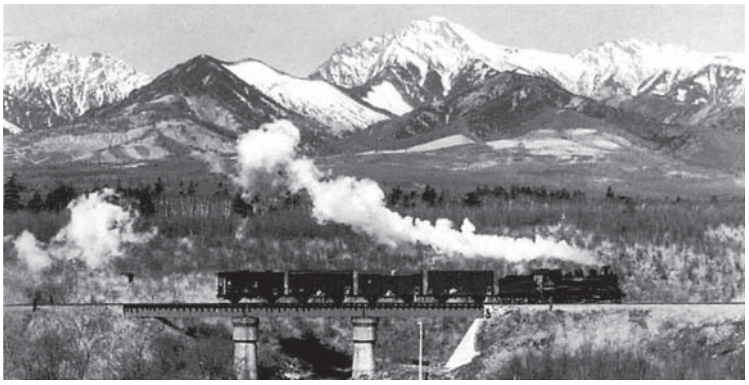
投票の結果は四四八七対四四七六。わずか一一票差で篠原に凱歌。一二〇年に及ぶ長野県総選挙史で、かくも激しい選挙記録は他にその例がない。

昭和になって、「工事中止となった鉄道をそのままにしてよいか……」という声が全国に高まった。工事を渋る政府も工事再開を決めた。

このころ、篠原は小海線全通のため、日夜にわたる激務がたたり、一九三〇（昭和5）年の総選挙も病身で街頭に立った。結果は最下位でかろうじて当選したが、選挙の六か月後に四九歳で急死した。まさに小海線全通のために、その生涯をささげた政治家の最期であった。

●白亜の野辺山駅に一番列車

小海線の工事は、小海、小淵沢の南北二か所から始まった。佐久鉄道の小諸―小海間も、一九三四（昭和9）年には鉄道省に移管された。工事は最後に残った小海北線の信濃川上と、小海南線の清里の区間が一九三五（昭和10）一一月二九日に結ばれた。



最後の工事となった信濃川上－清里間の鉄橋を通過するC56蒸気機関車。
小海線が全通した頃から1972（昭和47）年まで走り続けた。
（写真提供　磯貝憲正氏）

思えば佐久鉄道が小諸―中込間に工を起こして二二年目、小海線はここに、全路線七八．九キロの全線開通をみた。

この日の野辺山高原は、初冬の冷たい陽をあびながら、さわやかに晴れわたった。八ヶ岳もこの朝一番列車を歓迎するかのように、新雪できれいに化粧された。流線型で白亜の野辺山駅も、この高原列車を迎えるにふさわしく、その壁は目に痛いほど、初冬の原野に光っていた。

初代野辺山駅とC56

そして、二〇一五（平成27）年には、佐久鉄道敷設一〇〇周年、小海線全通八〇周年を迎える。

（中村勝実）

・・・

佐久の先人たち㉗

佐久の文化と産業を支えた

神津 猛

（1882～1946年）

志賀の豪農に生まれた猛は、若い頃に東京で学んだ学問を故郷に生かし、佐久の考古学や文学を育てた。日本の産業が近代化すると、家の資産をもとに銀行を開いて、東北信の製糸業を支えた。佐久の文化を高め、金融や産業の発展につくした人であった。

●生いたちと修業

神津猛は一八八二（明治15）年、志賀村（現佐久市志賀）の神津禎次郎の長男として生まれた。神津家は「赤壁の家」と呼ばれる豪農で、江戸時代の天保年間（一八三〇～四三）には田畑五〇ヘクタールをもち、一年に年貢米が数百石も運びこまれるほどの資産家であった。

猛が一一歳の時、長い間神津家を支えてきた祖父の包重が亡くなると、遺言により病気がちだった父に代わり、家を相続することになった。慶應義塾の幼稚舎に学ぶかたわら、鎌倉で療養していた父に連れられ円覚寺を訪ねた猛は、釈宗演老師から禅の教えを受け、後に「松岳」の道号を与えられた。慶應義塾に入ってからは俳句を始め、高浜虚子を師とあおぎ、二千余の句を詠んでいる。禅と俳句は生涯を通して真剣に打ちこんだ修業であった。

猛はそのほか木彫・写真術・考古学を学び、一八九九（明治32）年四月、慶應義塾を卒業すると、志賀の家へもどった。縁談の準備を進めていた母くらが突然倒れ、亡くなってしまう不幸があったが、その年の十二月に小諸の塩川家の娘てうと結婚した。

猛は父の教えを受けながら、家業に専念することになったが、その父も一九〇二（明治35）年一月に病気が悪化して永眠した。

神津猛が生まれた赤壁の家

●考古学の発展につくす

一八九八（明治31）年、東京帝国大学の坪井正五郎が芝公園丸山遺跡を発掘していた時、慶應義塾に在学していた猛は、福澤諭吉に連れられて毎日のように埴輪や人骨片の採集を手伝い、考古学に大きな興味をもつようになっていた。

結婚した翌年の春、平賀村（現佐久市平賀）瀬戸の八幡神社の神職が、土器や石器の収集家であることを聞き、それらを見せてもらうため訪ねた帰りに、畑の中で打製石斧や矢じりを発見する。その後も畑で薄手の土器や須恵器の破片を採集した。

さらに桑畑の中にあった三つ塚から、土棺の破片と植物の破片などを採集し、先に発掘した人から、直刀二本と板碑をゆずり受けた。猛は東京人類学会に入って専門家を信州に招き、内山・前山・大沢などへ案内して、矢じり・石さじ・石斧・曲玉など多くの採集品を発見した。

考古学に熱心に取り組んだ猛は、南佐久の遺蹟を人類学会に報告した阿部恵吉らの同志を得て、一九二九（昭和4）年には信濃考古学会を結成、自費で「信濃考古学会雑誌」を発行し、発掘物を独自の方法で整理するなど、考古学の発展につくした。

●島崎藤村との友情

一九〇四（明治37）年、猛は小諸義塾を訪れ、塾長の木村熊二や島崎藤村と初めて会った。その日の日記に「島崎氏は非常に快活な人で、立派な紳士とみるべ

き人物」と書いている。小諸義塾の教師として二七歳の時赴任してきた藤村は、てう夫人の実家近くに住んでいたことから猛と親しくなり、志賀の家へもたびたび招かれるようになった。

その頃の藤村は、塾生たちに英語を教えるかたわら、小諸や千曲川などを題材とした詩や文のほか、小説『破戒』を書き始めていて、小説の挿絵にする写真を猛に頼んでいた。しかし、藤村の給料は二五円と安く、本を出版する費用四〇〇円の捻出に苦しんだが、妻の実家や、猛からの生活費の援助もあって一九〇六（明治39）年に『破戒』は出版された。

本の扉には「この書の世に出づるにいたりたるは、函館にある泰慶治氏、及び信濃にある神津猛氏のたまものなり。労作終るの日にあたりて、このものがたりを二人の恩人のまへにさゝぐ」とある。小諸を去る時に、藤村は松の板でつくられた机と硯、後に『破戒』の原稿を猛に贈って、感謝の気持ちを表した。

『破戒』の原稿（北野美術館蔵）

その後も、藤村がフランスに滞在し帰国するまでの間、留守宅へ仕送りするなど、猛と藤村の友情は生涯にわたって続いた。

●銀行から松根油まで

第一次世界大戦の影響により、日本は好景気を迎え、佐久地方は養蚕と製糸業が盛んになった。一九一七（大正6）年、志賀銀行を興し頭取となった猛は、佐久の製糸業を支え、事業は収益をあげるようになった。一九二三（大正12）年には中信銀行の頭取、さらに五年後には資本金一四〇〇万円の信濃銀行の常務取締役となり、東北信の産業の発展に大きな役割を果たした。

ところが、一九二九（昭和4）年にニューヨークから始まった株価大暴落の影響が日本にも広がり、生糸の値が下がったことから、長野県内の製糸工場もつぎつぎに倒産した。製糸業者に貸していた金がもどらないため、信濃銀行は大きな赤字を抱え、預かっていた金を返すことができず、経営を続けることができなくなってしまった。

猛は銀行の責任者として、志賀の家を残し、田畑・書画・屏風などの私財千数百点を売り払ってしまった。そこには「本来無一物」という禅の精神が生かされ、全財産を失っても苦しみを表に出すことはなかった。

五二歳になった猛は、瀬下清や大沢喜市らに相談し、上京して釈宗演老師の年譜の編さんなどを行っていたが、日中戦争が始まった一九三七（昭和12）年の秋に、再び志賀にもどった。

太平洋戦争の終わりごろになると、燃料が不足するようになり、国は松から油を取る計画を立てた。神津家の裏山には松の大木が生えていたが、すでに切り出してしまっており、残った松の根が勤労奉仕隊によって掘り出された。

猛の長男得一郎は農芸化学の専門家で、松根油をつくる装置の設計から製造までを行った。父子は研究を重ね、製造に成功した松根油をドラム缶に入れて送った。しかし時すでにおそく、日本は終戦を迎えた。

戦中・戦後の食糧不足と、昼夜にわたる松根油製造の仕事は、猛の健康をむしばんでいた。明治時代から大正・昭和にかけて佐久の文化を育て、生涯を金融や産業の発展につくした猛は、終戦の翌年、一九四六（昭和21）年六月二一日、六五歳でこの世を去った。

（小林收）

参考文献

大澤洋三『赤壁の家』ほおずき書籍

伴野敬一「神津猛の考古学と江上波夫」『佐久』第58号　佐久史学会

佐久の先人たち㉘

佐久に自動車交通網を築いた

小池森太郎

（1887～1933年）

自転車のスピードにあこがれ、野沢で自転車店を開いて佐久の人々に自転車を普及させた森太郎は、自動車が走るようになると、乗合自動車やトラックを走らせて人々に喜ばれ、産業の発展に大きな貢献をした。

●自転車を普及させる

佐久地方で自転車が使われたのは、いつだったであろう。一八九三（明治26）年一一月二日、小諸義塾の木村熊二日記に「試自転車」とあり、五日には「稲垣自転車を修復し来る」と書かれているのが初めてと思われる。

小池森太郎は一八八七（明治20）年野沢に生まれた。若いころ東京に出て自転車店で働き始め、興味をもって乗りまわすうちに、色々な乗り方を覚えた。彼は人が集まる上野の不忍の池のほとりで、自転車競争をしたり、時には曲乗りをしたりしていた。

森太郎は臼田の山下猛弥のすすめもあって、ふるさとの野沢に帰ると、一九一八（大正7）年ごろに自転車店を開いた。当時の人々が移動する方法は、歩くか、馬車に乗る位しかなかったので、自転車のスピードは人気を集めた。しかし自転車は高かったため、買えるのは中古車で、こわれると修理して乗っていた。

自転車は若い男たちの間にたちまち広がり、野沢や岩村田では競争会や遠乗り会が行われるようになった。さらに、自転車にかかっていた税金が、中学校（今の高校）への通学に使う場合は免除されるようになり、佐久地方でも急速に普及した。

●自動車部をつくる

自動車が佐久地方に姿を見せたのは、小諸の小宮山荘助日記に「午前九時東より小諸を始めて自動車通行す」とある一九〇七（明治40）年頃と思われる。その後、東京の内山自動車が、小諸・岩村田・野沢・望月などで自動車試運転を行っている。

自転車の販売と修理をしていた森太郎は、自動車にも興味を持つようになっていたが、アメリカ製の新車はその頃二〇〇〇円～三〇〇〇円もしたため、高くて買うことができなかった。

そんな時に、松代町（現長野市）の小鉄自動車商会が火事になって、車庫にあったフォードの五人乗りの車が半焼けになった。森太郎はこの車を安く買うと、修理して磨き、動くようにして乗り始めた。

一九一九（大正8）年、岩村田の市川正令ら四人が佐久自動車商会をつくり、小諸―岩村田―臼田間と岩村田―望月間で乗合自動車の営業を始めた。森太郎はこれに加わり、翌九年に小池自動車部をつくって、野沢―岩村田間を一日一二回運転した。さらに路線をのばし、小諸―塩名田―中込や望月―田中など、鉄道が通っていない村々にも走らせたので、ほかの路線より高い運賃でも乗る人が多かった。自動車部の収入は増え、新しい自動車を買い入れることができた。

小池自動車の乗合自動車
（大正中期　井出忠昭氏蔵）

一九二三（大正12）年、関東大震災が起きて、東京は焼け野原になってしまった。森太郎は、佐久の自転車を買い集めると、自動車に積んで東京でお世話になった店や、人々に自転車を送って、たいへん感謝された。これをきっかけにトラックを買って、佐久から東京へ荷物を運んで、東京の復興につくした。

●小池自動車の発展

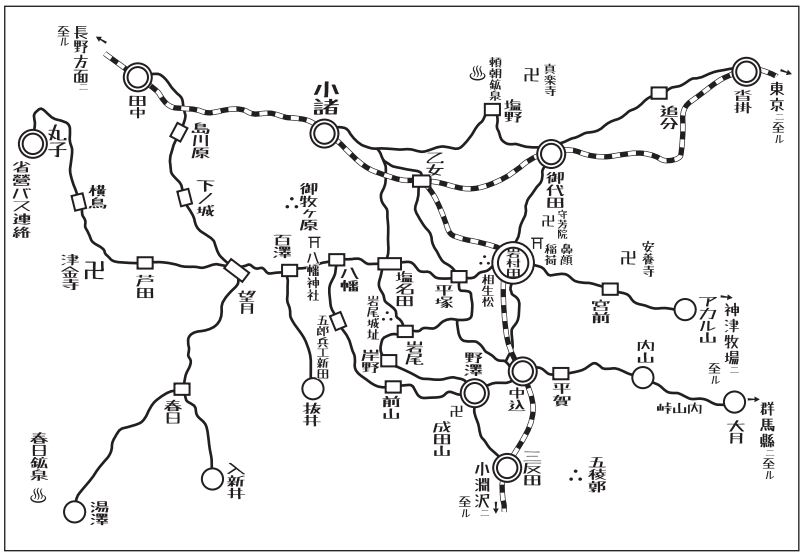
一九二六（大正15）年、野沢の城山館で小池自動車株式会社（資本金八万円）の創立総会が開かれた。ここで森太郎は社長となり、常務に相馬朝四郎、取締役に小池豊次郎らが就いた。

それまでの乗合自動車は、五人～七人乗りの小型車であったが、流線型でスピードが出る、大型で乗心地の良いバスを走らせ始めた。路線のどこでも手を挙げれば乗ることができ、制服を着た車掌がお客をやさしく扱ったので、利用する人が増えた。また、信越線御代田駅に上野から午後一〇時二分に着く客を、三反田（今の臼田駅）まで運ぶなどの便をはかった。

一九二八（昭和3）年には自動車二四台をもつまでになり、純利益一万五八〇〇円余をあげるほどの会社に成長した。小池自動車の発展により、佐久地方の人々の交通の便が良くなり、各地に乗合自動車会社が相次いで誕生した。この年には

小海自動車㈱　小海駅―海ノ口間
一山小商会㈾　中込駅―内山間
山鉄自動車㈾　臼田―小海駅間
川西自動車㈱　芦田―畦田―滋野―島河原間
菱野自動車　小諸―菱平間
箱根土地㈱　軽井沢―沓掛―千ケ滝

のほか、大日向・志賀・星野温泉へと山間部まで乗合自動車が走るようになった。



1936（昭和11）年当時の小池自動車路線網

●千曲自動車へ

森太郎は、病のため一九三一（昭和6）年に社長を退いて、東京根岸の病院で治療を続けていたが、一九三三（昭和8）年六月九日に帰らぬ人となった。四六歳の若さであった。

自転車や自動車のスピードにあこがれた森太郎は、周りに先駆（さきが）けて自転車の曲乗りや修理の技術を身に付け、自動車の運転免許を取った、機械や新しいもの好きな人であったといえる。

自分の好きな乗物を楽しむだけでなく、それを事業として利益を上げるまで発展させ、大正から昭和初期にかけての、佐久地方における乗合自動車の黄金時代を出現させたのは、小池森太郎の功績である。

小池自動車はその後も路線を拡大し、千曲自動車㈱から千曲バス㈱へ社名は変わったが、佐久地方や上田小県地方のバス会社として、多くの人々の通学・通勤や買い物客・病院へ通う人々のために便宜（べんぎ）を与え続けている。

（小林收）

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

参考文献

「小池自動車株式会社決算書」

大井隆男『図説・佐久の歴史 下巻』郷土出版社

佐久の先人たち㉙

女子学徒の命を救った軍医

小池勇助

（1890～1945年）

郷里で眼科医院を開業していた小池は、戦争の渦に飲みこまれ、軍医として各地に出征。最期の地となる沖縄で学徒隊の少女らを預かることとなる。戦闘が激化し命の危険が迫る中、少女たちに「絶対に死んではならない」と最後の言葉を伝えた。

●医学を志す

小池勇助は一八九〇（明治23）年七月二五日、南佐久郡野沢村（現佐久市野沢）で、男五人、女一人の兄弟の次男として生まれた。

生家は現在の千曲バス本社の辺りにあり、野沢中学校（現野沢北高校）に通っている頃から、母方の伯父で内科・小児科の医師だった阿部葉太のもとで医学を習い、その後は金沢医学専門学校（現金沢大学医学部）へと進み内科を専攻する。

第一次世界大戦が始まった一九一四年（大正3）年、金沢医学専門学校を卒業した小池は、同年十一月に金沢歩兵第七連隊に入営し、その後、陸軍軍医学校で眼科を専攻する。

一九二五（大正14）年、三五歳の時に予備役となった小池は、帝国大学眼科教室で研究生活を送った後、千葉県銚子町（現銚子市）石津眼科病院の勤務を経て、一九二八（昭和3）年に故郷の佐久へ帰り、佐久鉄道（現ＪＲ小海線）中込駅前に小池眼科医院を開業した。

中込駅前にあった洋風の小池眼科医院
中澤道保氏蔵

小池は診療時間が終わると近くの川で釣りをし、日曜日は家族連れで温泉に出掛けていた。気の短いところもあったが、根は快活で温情に富んだ人柄で、治療費を払えない患者からは集金しないなど、優しく義侠心をもった医師であった。

評判を聞きつけ、小池の医院には多くの患者が訪れていたが、世界の状況は不安定さを増し、やがて戦争へと突入していく。

●軍医として出征

軍医でもあった小池は、一九三七（昭和12）年から始まった日中戦争を皮切りに、一九四一年（昭和16）年からは満州、そして一九四四（昭和19）年八月、最期の地となった沖縄へと出征する。

一九四五（昭和20）年三月、小池が隊長を務めていた第二野戦病院に、那覇市にあった積徳高等女学校の生徒25名からなる「ふじ学徒隊」が配属された。学徒隊とは太平洋戦争末期、沖縄守備隊に動員された男女中等学校生徒の総称で、女子学徒隊は主に傷病兵の看護（食事の世話、排泄物の処理、包帯の交換）のほか、手術の手伝いなどに従事していた。

前年十月にはアメリカ軍の空襲により那覇市の9割が焼け落ちており、ふじ学徒隊が野戦病院に配属されて間もなくの四月一日、沖縄本島にアメリカ軍が上陸し、地上戦が始まった。豊見城城址にあった野戦病院には次々と負傷した兵隊が運ばれ、小池や女子学徒たちは、不眠不休で治療や看護にあたった。

戦況はさらに悪化し、沖縄守備隊は司令部があった首里を五月二二日に放棄し、南部へと撤退する。小池らも砲撃を受ける中、雨の夜道を移動し糸洲（現糸満市）のガマと呼ばれる自然洞窟にたどり着いた。

洞窟は幅が7～8ｍ、高さが5～10ｍほど。中は真っ暗で水が流れていたため、近くの集落から戸や壁板、

柱などを運び込み、その上に患者を寝かせて看護していた。

再現された病院壕内の様子
（沖縄県平和祈念資料館提供）

●最後の言葉

ガス弾攻撃に苦しめられ、医薬品や食料が不足し満足な治療を行うこともできない中、衛生兵は斬り込み隊として次々に壕（ごう）を出ていった。「こんな悲惨な状況になるとわかっていれば、皆さんを預かるんじゃなかった…」小池は女子学徒らにそう語っていた。

アメリカ軍の激しい攻撃が続き、日本軍がほぼ壊滅した六月中旬、各地の女子学徒隊に解散命令が下された。小池は戦闘が鎮静化するのを待ち、六月二六日、ふじ学徒隊に対し解散命令を下した。

小池は隊長としての最後の訓示で、「現在まで奮闘いただいてご苦労だった」とねぎらい、自決を覚悟する女子学徒たちに「必ず生き残って家族のもとに帰りなさい。絶対に死んではならない」と諭（さと）した。そして「悲惨な戦争の最後を銃後の国民に語り伝えてくれ」と呼びかけ、一人ひとりと握手を交わした。

小池の指示に従い、学徒隊は2、3名ずつの組となって壕を脱出し、そのほとんどがアメリカ軍に投降した。いったん脱出した学徒の一人が壕の中に戻ると、副官がかたわらで見守る中、小池はすでに自決していた。五四歳だった。

南の孤島の果まで守りきて
御楯（みたて）となりてゆく吾を
沖のかもめの翼にのせて
黒潮の彼方の吾妹に告げん

残された辞世の詩には、遠く離れた故郷を想う気持ちがこめられていた。

●その後のふじ学徒隊

小池の解散命令からほどなくして、沖縄戦が終結した。わずか三か月の間に約二〇万人が犠牲となり、その中には学徒隊も数多く含まれていた。特に激戦地となった沖縄本島南部では、解散命令の後に戦闘に巻き込まれたり、集団自決が行われたりした「ひめゆり学徒隊」など、ほとんどの学徒隊が半数以上の戦死者を出した。しかし、小池の言葉を守ったふじ学徒隊の戦死者はわずか3人にとどまった。

焼野原となった沖縄は、一九七二（昭和47）年に返還されるまでアメリカの統治下におかれ、戦後も困難な時期が続いた。ふじ学徒隊の元看護隊員たちは小池隊長のことばを生きていく支えとし、悲惨な戦争体験や、命と平和の尊さを様々な場所で語り続けた。

戦後六〇年以上が経った二〇一二（平成24）年、今後も学徒隊の体験を次の世代に語り継いでいくため、短編ドキュメンタリー映画「ふじ学徒隊」が製作された。当時の状況を語る元女子学徒らは、八〇歳を超える高齢となってからも、小池が眠る野沢の本覚寺を訪れて法要と墓参りを行うなど、感謝の気持ちを持ち続けている。

小池が自決した糸洲壕近くに建つ鎮魂の碑

（木村直木）

参考文献

佐久医師会誌編集委員会『医療の譜』佐久医師会
野沢北高等学校創立百周年記念事業実行委員会
『野沢中学校野沢北高等学校百年史』

佐久の先人たち㉚

3000人を超える赤ちゃんをとりあげた助産師

柳本（やなぎもと）みつの

（1894～1976年）

戦中戦後の苦しい時代、女手一つで８人の子どもたちを育て上げるかたわら、みつのは助産婦として3000人を超える赤ちゃんをとりあげた。自分の苦労を外に出さず、地域の人たちのために尽した善行の数々は、永遠の母として今なお語り継がれている。

●しばおこし

柳本（旧姓嶋崎）みつのは、一八九四（明治27）年、南佐久郡臼田町（現佐久市臼田）の〝しばおこし〟（方言で、その土地を開拓して最初に住み着いた家）権蔵、らくの四女として生まれた。

臼田尋常小学校（現臼田小学校）に入学したみつのは、権蔵が子弟の教育に熱心だったこともあり、一九一一（明治44）年に補習学校を卒業した後、南佐久臼田看護婦講習所の講習を受けたが、六カ月の講習に満足出来ず、東京の日本赤十字社看護婦養成所に入学する。当時佐久鉄道（現小海線）は開通していなかったので、小諸駅まで五里（約20㎞）の道を歩き上京した。一九一四（大正３）年に養成所を優秀な成績で卒業。婦長候補としての教育を一年間受けた後、婦長として働くかたわら、助産婦の資格もとった。

一九一九（大正８）年、数え二六歳になっていたみつのは、「淋しいから帰って来ておくれ」という父の言葉に心を動かされ、日赤中央病院を退職し臼田町へ帰った。看護婦講習所に講師として招かれたみつのは、看護実習を教えることになる。同じく講師を務める医師の中に田口村（現佐久市田口）の柳本卓爾（やなぎもとたくじ）がいた。

●お医者さんの家

一九二〇（大正９）年の夏、伝染病が流行した。みつのは病院へ呼ばれ泊り込みの看病にあたっていたが、そこに卓爾が往診に来ていた。

あわただしい夏が終ると、郡医師会長の仲人で、二人の縁談が進められた。卓爾は三人の子をのこして先妻に先立たれていたため、みつのはいきなり一歳二カ月の男の子と、三歳と七歳の女の子の母親となった。卓爾が開業していた下越（しもごえ）の医院で、みつのは看護婦だけでなく、助産婦としての活動を始める。その働きぶりは「奥さんはいつ眠るずら」と他の看護婦やお手伝いさんが不思議がるほどであった。

龍岡藩の御殿医だった柳本家には古くからのしきたりがあり、姑や小姑は厳しかったが、みつのは三人の義理の子の母になろうと一生懸命に働き、〝しばおこし〟の出としての自負から、実家へ泣き言など一度も言ったことはなかった。

●看護婦長として召集

一九三七（昭和12）年から始まった中国との戦争のため召集されていた卓爾が過労で倒れたため、みつのは広島陸軍病院まで迎えに行った。帰郷の途中に安芸の宮島に立ち寄ったが、これが夫婦二人の最初で最後の旅行となってしまった。

日本赤十字社東京支部救護看護婦長時代のみつの

卓爾の帰郷と入れ替わるように、みつのは日本赤十字社東京支部救護看護婦長として、東京第一陸軍病院へ召集される。四女、五女はまだ小学生。村中の女性が見送る中、汽車の窓から身を乗り出し、何回も何回も頭を下げた。

小さな子どもたちを残して出征したみつのは、夫を

看取ることもできなかった。翌年卓爾は帰らぬ人となり、千曲川河畔に病院を建てるという計画は果たせないままとなった。

一九四一（昭和16）年一二月、任務を終え子どもたちのもとへ帰って来たみつのは、翌年、看護婦長としての功績により勲八等瑞宝章を授与された。四三歳で召集されてからの四年間で、真っ黒だったみつのの髪は真っ白になっていた。

●日本のお母さん

村に帰ったみつのは、すぐに国防婦人会長、助産婦としての活動を始めた。戦中戦後の日本は疎開者や引き揚げ者があふれ、食べるものも着るものもない時代。

みつのは四八歳になってから自転車を習い、お産で呼ばれると近隣の町や村へも昼夜の区別なくかけつけた。貧しい家からは助産料をもらわないどころか、栄養をつけるようにと米や野菜を家へ運んだり、着物や浴衣を持って行っておむつにしてやったりもした。

自転車で往診するみつの
（写真提供　主婦の友社）

時には赤ちゃんを包むため、自分の着ていた肌着まで脱いであげてしまい、「寒い寒い」と帰って来たのをみつのの子どもたちは見て育った。

こうした献身的な行いから、一九五五（昭和30）年「日本の母」として主婦の友社より顕彰を受ける。

赤ちゃんをとりあげるみつの
（写真提供　主婦の友社）

一九六三（昭和38）年、胃潰瘍（いかいよう）や血清肝炎（けっせいかんえん）にかかったみつのは、翌年助産婦の任を閉ざす。七〇歳だった。三〇歳の時からとりあげた赤ちゃんは四〇年の間に三千人余に達したという。

その後みつのは、寒い冬は東京の娘の元で過ごし、夏は涼しい信州でとうもろこしや枝豆をつくって、子や孫が帰ってくるのを待っていた。

一九七六（昭和51）年六月八日、八二歳になる直前に死去。菩提寺（ぼだいじ）の蕃松院（ばんしょういん）で行われた葬儀には、お世話になった村中の人々が列をなし、涙ながらに見送った。

●いのちの尊さ ひとさまの為に

みつのが亡くなってから23年後の二〇〇〇（平成12）年、地元有志らでつくられた「柳本みつのさんの碑を建てる会」の呼びかけに、町内外の八六五人が賛同し、臼田駅前広場に碑が建立された。

四月二三日の除幕式には大勢の人が参加し、みつのの娘や孫、曾孫も駆けつけた。

臼田駅前に建てられた碑。みつのが最初にとりあげた故高橋信行の筆による。

以来毎年一一月三日、碑前祭が行なわれている。すでにみつのを知らない世代になってきているが、なお語り継がれている「いのちの尊さ　ひとさまの為に」の碑前には、今も花が絶えない。

（西来みわ）

・・・

佐久の先人たち㉛

平根発電所と浅間病院の創設に貢献した

森泉武重

（1903～1988年）

農業用水路を利用した自家水力発電所を建設し農村電化を促進すると共に、村内に工場を誘致して村の活性化を実現した。また、国保浅間病院創設のため、東京大学に医師派遣をねばり強く懇願し、その実現に貢献した。

●自家水力発電所建設の構想

森泉武重は田畑で一ヘクタール強の耕作のほか、産卵鶏の多頭飼育、自家産大豆を原料にした厳寒期の豆腐づくりなどの複合経営を行う村内きっての精農家であった。

一九四七（昭和22）年、農村建設連盟の後援を受け、初の公選村長に当選した森泉は、次々に積極的な村政を進めた。特筆すべきは平根発電所の建設である。

一六五二（承応元）年に平尾氏によってつくられた平尾用水は、断崖絶壁を貫く難所も含め、総延長約六キロメートルに及び、素掘りのため毎年その補修作業に、村民は大変な苦労を強いられてきた。村長となった森泉は、三〇〇年来の大仕事となる用水の改良をまず計画し、さらに用水改良を機に、農村の振興策としてその水路を併用した水力発電所建設の構想も描いていた。

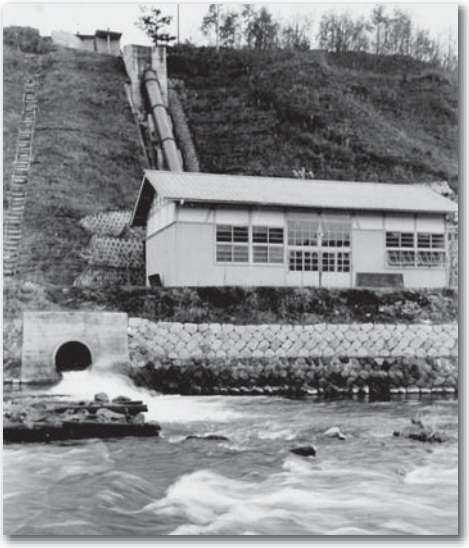
平尾用水改良工事の起債が一九五三（昭和28）年に許可されると、同年一一月に自家水力発電所建設の決定を行い、農業用と発電用を兼ねた用水路改良工事に着手することになった。

人力による発電所導水管の工事
1954（昭和29）年　森泉一成氏蔵

●困難を乗り越え村総動員体制で

しかし、いくつかの困難があった。①農業用水を発電用にも利用することによる灌漑への影響 ②村財政の長期借入と起債等に対する村民の不安 ③三井村（現佐久市）、伍賀村（現御代田町）等の水利許可が必要であること ④電気事業を、村営や農業協同組合営で行うことに対する通産省や電力会社の抵抗…等。これらに対して、森泉は自ら多数の陳情書・申請書類を書きあげ、粘り強い信念を持ち続けて乗り越えていった。

発電所起工式の日はどしゃ降りの雨であったが、「ワラジにゲートルの姿で真っ先に駆け付け、一升ビンを持って村民が来るのを待っていた」森泉村長の姿を見て、村の青年達は感動したという。



落差33mの平根発電所
森泉一成氏蔵

また平根農協の役員（組合長…槻沢徳太郎、専務…森泉丑之助）等も資金の獲得などの協力体制を敷き、村当局者をバックアップした。用水路改良工事は各戸からの勤労奉仕、青年団の無料奉仕、さらに村の中学生までが動員されて村民総動員体制が取られた。

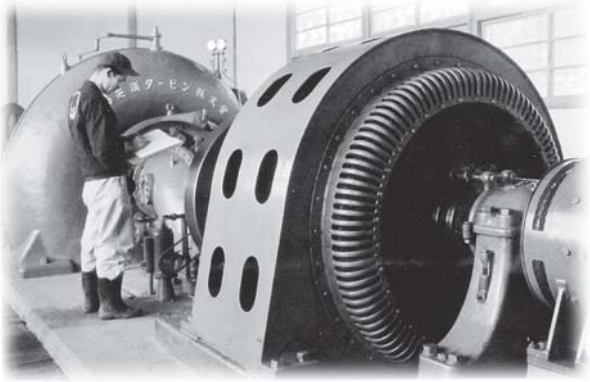
その結果、一九五四（昭和29）年五月三日に竣工し、

受益面積百九〇ヘクタールの田植えに間に合わせることができた。その後、発電所の本体工事に着手し、平根発電所（最大出力五五〇キロワット）は翌年に稼働した。

このように、平根自家発電所の完成は、森泉村長の忍耐強い努力とリーダーシップのもとで、それに応えた村民の村振興への強い願いがあったからと言える。

●地産・地消の自家発電で地域振興

自家発電の電力は、新設された平根農協電線工場、プラスチック工場、学校給食を中心に一日約七千個ものパンを製造した工場などで主に使用した。佐久地域には工場が少なかったので、これらの工場ができたことにより村外を含めて多くの若者が従業員として採用された。なお、平根農協電線工場は、後に三映電子㈱の平根工場として移管された。



建設当初のタービンと発電機（現在も稼働中）
1955（昭和30）年　森泉一成氏蔵

平根発電所の建設は全国でも注目されるようになり、日本人文科学会により詳しい調査が行われた。また、学習研究社の小学生向け月刊誌「三年の学習」一九五七（昭和32）年三月号では、平根発電所により村が豊かになったと紹介された。

福島の原発事故後、自然エネルギーを利用した水力発電の重要性が注目されるようになり、二〇一二（平成24）年、これまでJA佐久浅間が所有していた発電所を佐久市が取得し運営することとなった。発電された電力は平尾山公園で利用され、残りは売電している。

●「浅間総合病院」の開設

一九五四（昭和29）年、合併により浅間町（現佐久市）が発足すると、助役となった森泉は、北佐久郡地域の基幹病院となる現在の佐久市立国保浅間総合病院開設に中心的役割を果たした。

当初は地元医師会の賛同が得られず、県の医療機関整備審議会は結論を出さなかった。森泉は決死の覚悟で県の部長に対し「北佐久郡民挙げての切望が、少数意見のためによろめくような県政なら、直訴手段を取ってでも県に踏み切らせる」と言い寄った。

その後、同審議会は前向きの答申を行い、浅間病院組合と地元医師会との間でも協定書が調印され、一九五八（昭和33）年に浅間病院開設の許可が得られた。

●東京大学医学部への医師派遣依頼

森泉は理想的な国保総合病院の創設を願い、東大に医師派遣を依頼するため何度も上京した。妻きよのによると、革靴を何足か履きつぶすほど上京を繰り返したが、当初は教授に会うことさえもできなかった。

それでも諦めずに医師派遣を懇願し続けると、その熱意が通じたのか、ある日、医局長から「冲中教授が面会して下さる」との親書が届いた。この時、森泉は小躍りして喜んだという。

冲中教授が医師派遣の条件として、病院の医療設備を高度にし、医師が働きやすい環境を整えられるか問いかけると、森泉は「月の世界にあるものならいざ知らず、地球上にある物なら何としても整えます」と答え、補助金の対象外だった機器の購入を即決した。

こうして浅間病院は一九五九（昭和34）年に、東京大学医学部より吉沢國雄院長を迎え、一般病床二〇床で開院した。現在の総病床数は三二三床である。

（森泉昭治）

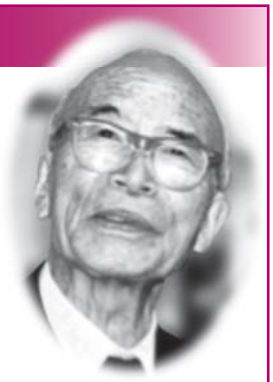
・・・

佐久の先人たち㉜

五郎兵衛用水中興の祖

中澤周三

（1907～1991年）



県営土地改良事業への早期取り組みに併せ市川五郎兵衛翁の遺徳を継ぎ、五郎兵衛用水の大改修と鹿曲川から御牧ケ原台地への用水の開発に情熱を燃やし、地域発展に貢献した政治家。

●多彩な師と友に恵まれた生涯

中澤周三は一九〇七（明治40）年、北佐久郡五郎兵衛新田村（現佐久市浅科）の染色業と農業を営む家に生まれた。終生の友として用水改善事業を共に遂行した伊藤一明とは、御牧尋常高等小学校に入学する頃に出会った。

一九二一（大正10）年、野沢中学校（現野沢北高校）に入学した中澤は、校風について校長と意見が対立するが互いに譲らず、三年生の春に学友数名と中退し上京する。中学の担任和合恒男はこれに抗議して自らも退職。以降和合は多大な援助と指導を中澤に授けた。

一九二五（大正14）年、東京の中央郵便局で勤務を始めた中澤は、翌年肺尖カタルを煩ったため帰郷した。

一九二八（昭和3）年、金融恐慌の煽りを受け農村が疲弊する中、中澤は五郎兵衛新田村の土屋村長に見い出され、21歳の若さで収入役となった。

その頃、禅の修行を積んでいた中澤は、一九三一（昭和6）年、道号「竹渓」を授かった。また自由律俳句の荻原井泉水の門下に入り、俳号を普周として句作にはげみ、「から松の峰ではれた原っぱです」が井泉水の主宰する句誌「層雲」で一位となった。

収入役時代、釈大眉老師（中央）と神津猛（左）とともに　『竹渓のながれ』所収

一九三二（昭和7）年、従兄の中澤始らとともに五郎兵衛翁の遺徳を偲び円心会を結成、近郷の青壮年と農村改善について学び語りあう。翌年、収入役を辞任し、和合が主宰する瑞穂精舎で学ぶ。さらに一九三四（昭和9）年に江渡狄嶺が主宰する東京の牛欄寮にて農を尊ぶ精神を学ぶも、体調を崩したため、再び五郎兵衛新田村に戻った。

江渡の推薦により、帰郷した翌年から長野県庁の嘱託職員として農村更生のために働き始めるが、一九三七（昭和12）年に従兄の始が死去したことから、本家の後継者となるため帰郷。結婚して家業の染色業に従事し、染色工業組合の設立などに携わった。

一九四五（昭和20）年、召集され中国大陸に渡るも赤痢に冒され、生死の境をさまよい同年暮れに帰国。しかし「敗残兵が松の内に帰る訳にはいかぬ」と翌年一月十五日過ぎを待って帰宅した。

●郷里の人々と共に

第二次世界大戦後の荒廃から立ち直るため、農業農村の発展を願い、一九五二（昭和27）年に五郎兵衛新田村の村長となった中澤は、村会議員らと鹿曲川水系の総合開発を企画し、関係町村との協議に入った。

しかし水利問題には各町村の利害や長いしきたりが深く絡まっており、頓挫することもしばしばであった。

一九五四（昭和29）年、北御牧村（現東御市）の保科岩雄村長及び小諸市の小山邦太郎市長から御牧原台地への揚水要請があり、これを受けて事業実施の機運は高まった。

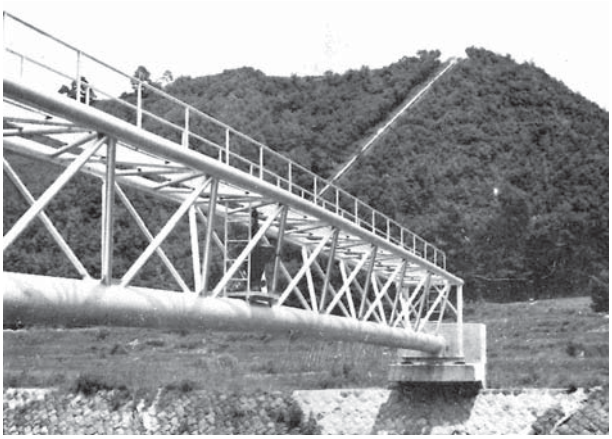
翌年には中津村、五郎兵衛新田村、南御牧村の合併

を先導し、浅科村創設に尽力した。条例を定め、山林の収益を五郎兵衛用水の管理費に充てることを条件に合併を実現させた中澤が、同年浅科村村長を辞し、長野県議会議員に初当選した頃、ようやく鹿曲川県営灌排水事業が実施にうつされた。

建設から三百数十年が経ち、漏水などがひどかった用水路を全面近代化することにより、水系の各所での夜を徹し行われた「水番」や、他人の水を横取りしたことによる「水喧嘩」は昔語りになった。

改修を終えた五郎兵衛用水の築堰（中原地籍）

さらに、改修により生じた剰余水を御牧原台地へ分与することができるようになり、溜め池しか無かった広大な御牧原台地に流水が巡り、水不足から解消された人々は喜び「あぁ　ありがたきかな此の水」との碑を建てて祝った。



御牧原台地へ水を運ぶ鹿曲川水管橋と望月サイフォン
『県営御牧ヶ原農業水利改良事業竣工記念集』所収

ここに至るには頭首口からの取水につき下流の本牧村（現佐久市望月）や北御牧村（現東御市）の同意が不可欠であり、話し合いは長期に及ぶ。夜ともなればバスは無い。自転車で役場や村長宅を訪れ話し合いを重ねた。こうした努力や挫けない態度が人々の理解と共感を生んだのだろう。誰言うとなく「五郎兵衛用水中興の祖」と評されるようになっていった。いち早い土地改良事業の先見性と熱意とが郷里の人々に評価されたのである。

幼い頃は勿論、学生時代、若くして就いた収入役時代、村長、県会議員時代を通じて指導を受けた沢山の個性的な師、心から許し頼み合った友との豊かな交友は、彼の生涯を彩る特筆すべき幸運であり、これが多方面で精力的な活動を支えた力になったといえよう。

●平和で豊かな農村の発展のために

中澤は農業・農村の振興分野以外にも多様な足跡を残している。地域の住民運動へと発展した浅間山米軍演習地化反対や水源地の国有林払い下げ撤回のほか、軽井沢三笠ホテル取壊しに抗して一條重美らと奔走撤回させ、重要文化財指定に導いた。

また五郎兵衛記念館を設立して、村々に残る資料の散逸を防ぎ、さらに調査・研究のため、信州農村開発史研究所を設立した。

そのほか、浅間病院開設に尽力し国民健康保険直営病院として実現し、佐久総合病院の若月院長と奔走し全国農村保健研修センターを完成させるなど、彼の生涯はまさに狄嶺の説く「農民と共に」あった。

蓼科山の頂に残雪流れし五郎兵衛田圃青田なり

（虎雁）

（佐藤治郎）

・・・

佐久の先人たち㉝

中央俳壇で活躍した近代俳人

相馬遷子

（1908～1976年）

野沢町（現佐久市野沢）に生まれて、親の転居に伴い小学生の時に一旦この地を離れたが、何かの力に引き寄せられるように、生れ育った父祖の地へ戻り医院を開業し、そして中央俳壇で有力な俳人として活躍した人。

●医師そして俳人の道へ

俳人相馬遷子（本名富雄）は一九〇八（明治41）年野沢町（現佐久市野沢）に生まれた。家は薬店を営んでいたが、富雄が小学校五年の一九一九（大正8）年に父は店を譲り、上京して米穀商を始めた。遷子は旧制浦和高校（現埼玉大学）を経て一九三二（昭和7）年三月に東京帝国大学（現東京大学）医学部を卒業する。そして医学博士となり医局へ勤めた。

遷子は、一九三五（昭和10）年に教授を中心とする東大医科出身者の俳句の集まり「卯月会」に入る。そして俳誌「ホトトギス」を主宰した高浜虚子門を出て俳誌「馬酔木」により新しい叙情性を導き出すとともに、この俳誌から俳句界屈指の俳人山口誓子・加藤楸邨・石田波郷等を育てた俳人水原秋桜子の指導を受け、師弟として親しく交流した。

また、遷子はこの「馬酔木」により句作に励むとともに、後には楸邨らと人間探求派と呼ばれる石田波郷に兄事し、波郷が創刊主宰した俳誌「鶴」に参加、次の年にはその同人に推された。そして、その次の一九三九（昭和14）年には大きな結社誌であった「馬酔木」の新人賞を受賞し、その翌年には同人となった。

●戦地へ函館へそして故郷へ

太平洋戦争の始まる前年の一九四〇（昭和15）年春に遷子は陸軍衛生部見習士官として応召し、日中戦争中の大陸へ出征した。しかし、病気で除隊となり、本土へ送還され療養に入った。病気が癒えた遷子は、一九四三（昭和18）年に函館病院内科医長として招かれ北海道へ渡った。この地に「鶴」同人で俳誌「壺」を主宰する斎藤玄がいて交流した。そして一九四五（昭和20）年、遷子はここで太平洋戦争の敗戦を迎えた。

敗戦の翌年の三月に遷子は病気になったこともあって函館を去り故郷の佐久へ戻った。五月には斎藤玄の助力で句集『草枕』が刊行された。この年東京で入院手術を受けた。

再び病気の癒えた遷子は次の年の三月に野沢本町の大欅女男木と道を挟んだ向かいで内科の医院を開業した。東京で病院勤務をしていた弟愛次郎も帰郷して外科を担当した。医院はその後転居し、ここは呉服店となった。

開業当時、相馬医院が建っていた場所
現在は呉服店の本社となっている。

●数々の俳句賞を受賞する

開院前も志賀高原や上高地等への吟行をしたが、医院を営みながらも、高原派と呼ばれる句友星眠らと交わりながら句作を続け「馬酔木」へ盛んに投句して、高い評価を得た。

一九五六（昭和31）年には第一句集『山国』（『草枕』を含む）を刊行した。この句集には師秋桜子の「高い境地に至り得た」との序文と波郷の跋文がある。これには「家を出て夜寒の医師となりゆくも」などの句がある。そして次の年には結社賞の馬酔木賞を受賞した。

第二句集『雪嶺』は一九六九（昭和44）年に刊行された。後記には「雪嶺は私にとって佐久の自然の代表」とある。この句集で遷子は第九回俳人協会賞を受けた。ここには医師として「卒中死田植えの手足冷えしまま」の句もある。この年に馬酔木同人会長になった。

●俳人遷子の句いよいよ佳境へ

医師そして俳人として励んでいた遷子は、一九七四（昭和49）年四月に胃癌を発病して佐久総合病院へ入院し手術を受けた。しかし、病状悪化で次の年の十一月に再入院となった。このような境涯の中で悲しくも作句はいよいよ冴えて「冬嶺の微塵となりて去らんとす」「わが山河いまひたすらに枯れゆくか」等々の句が詠まれた。この時遷子には、胸部を病み手術を繰返しながら秀句を残した波郷のことが脳裏に去来していたと思われる。

貞祥寺境内に建つ秋桜子連袂句碑

最後の句集となった、一九六八（昭和43）年からの八年間の作品を収めた第三句集の発刊は句友により進められていて、病床の遷子の許に届けられた。

その句集『山河』を手に遷子は六六歳で亡くなったが、この句集により遷子は波郷しか受けていなかった馬酔木最高の結社賞「葛飾賞」を受賞した。

●佐久市短詩形文学祭の選者に

相馬医院の相馬先生が優れた俳人であることは、俳句の結社を持ったり俳句の教室を持ったりしなかったこともあり、地元の人達にはあまり知られていなかった。それはそれが遷子の生き方であったからであった。しかし地元の患者に対する医師としての句も少ないわけではない。その中に次のような句「われを呼ぶ患者寒夜の山中に」もある。

また地元との関わりでは、佐久市の市政十周年を記念して一般市民参加の佐久市短詩型文学祭が一九七〇（昭和45）年から開催されたが、募集した詩・短歌・俳句・川柳のうち俳句の選者は遷子であった。次回からは選者は三人から四人となったが、遷子は病気で辞退するまで連続五回選者を務めた。その後の選者は句友星眠が引き継いでいる。

遷子の俳名はシナノガキの漢語の別名「君遷子」からとられていると言われている。これだけをみても遷子が故郷に並々ならぬ愛着をもっていたことが分かる。

没後一年、前山の貞祥寺境内へ師秋桜子との連袂句碑が建立された。

寒牡丹白光たくひなかりけり　秋桜子

雪嶺の光や風をつらぬきて　遷子

この佐久がそして長野県が誇れる俳人遷子の墓は、家の近くの野沢金台寺にある。

金台寺に建つ遷子が眠る相馬家の墓

（丸山正俊）

参考文献

筑紫磐井ほか四人『相馬遷子　佐久の星』邑書林

荒井武美『相馬遷子小伝』一草舎出版

堀口星眠脚註『名句シリーズ⑩相馬遷子集』宮下翠舟発行

相馬遷子『相馬遷子全句集』遠藤方記念刊行会

佐久の先人たち㉞

緑とともに生きた生涯

田中文雄（たなかふみお）

（1910～1998年）

「太陽は緑を呼び、緑は平和と生長のしるし……」。王子製紙の社長だった田中文雄は、同社の創立百周年記念碑にこう刻んだ。彼は緑が好きだ。その緑多き木材を原料とする製紙業界の道を歩み、緑とともにその生涯をつらぬいた。

●赤紙も航機要員で免除

田中は平賀村（現佐久市平賀）の出身。父は地元の小学校長などを務めた教育者で、九人兄弟の末子。名古屋の旧制第八高校（現名古屋大学）から九州帝国大学（現九州大学）林学科を出て、一九三五（昭和10）年、王子製紙に入社した。当時の王子製紙は、「製紙王」といわれた藤原銀次郎（長野市出身）が社長で、国内市場の八〇％を抑える、文字通り独占的な大製紙会社だった。

最初の勤務地は、北海道苫小牧工場の山林部。山の中の造林小屋に寝とまりし、買い付けた木材を測り、伐採の人夫や造林を監督した。山は最寄りの駅から三〇キロ近くもあり、人が通れる程度の寂しい山道を歩く。途中で熊に出会わないように、会社が支給してくれた豆腐屋のラッパを吹き鳴らしながら歩くのが日常だった。

北海道山中の山小屋
（写真提供　王子製紙株式会社）

山の仕事も六年目、一九四一（昭和16）年夏、突然ドイツへ出張を命じられた。中国との戦争も激しくなり、木材統制法制定準備のため、先進国ドイツの実情視察のためだ。ところが途中の大連（だいれん）まで行ったところで、独ソの開戦でドイツ行きは中止。その行きがかりで統制会社の北海道木材へ出向となった。

太平洋戦争がはじまり、木製飛行機を造るため、新たに航空機材課が設けられ、その課長となった。たまたま軍需省と協議のため上京中、彼のもとにも「赤紙」（召集令状）が来て、そのまま富山連隊に入隊した。

ところが入隊三日目に呼び出され、「軽い肺浸潤」を理由に即日帰郷となった。病気そのものはたいしたことはなく、飛行機の生産を重要視する軍需省が出した「航機要員」の申し入れ書がモノをいったようだ。後で聞けば、ビルマ（現ミャンマー）で半分が戦死した部隊もあったという。

戦後は統制会社の解散業務に当たり、これが終わると、もといた王子製紙に帰り、山林部技術課長から山林部長となった。

●気迫の話し合い交渉

山林部長にとって一番の難題はパルプ材の不足だった。そこで、北海道に持つ六万六千㌶の社有林を有効に使って、パルプ材を造成する「社有林三十年経営計画」をたてた。これにそって毎年一千㌶の植林をはじめた。

このさなかに起こったのが、一九五九（昭和34）年、一四五日にわたる王子製紙のストライキだった。この争議は単に一王子の問題ではなく、資本主義社会のなかの労働組合のあり方について、大きな課題を投げつけた〝歴史的な争議〟だった。

争議のきっかけは労働協約改定をめぐって、労働者の組合加入を義務付ける「条件付きユニオンショップ制」を、組合加入は労働者の自由意思に任せる「オープンショップ制」に改めようとした労使交渉が、決裂したことにあった。

田中が春日井工場長になったのは、争議がはじまり六か月たったころだった。ちょうど中央労働委員会あっせん案を労使が受け入れ、ストは一時中止していた。しかし組合側では休戦中にもかかわらず、職場闘争といって、本部の指令なしに下部組織が分散的にストを行う「山ネコスト」を波状的にくり返していた。

春日井工場の事務所周辺でデモを行う組合員
（写真提供　王子製紙株式会社）

入社以来、山林部門で育った田中は、労使問題は全くの素人。いろいろ考えても、経験がないのでいい知恵も浮かばない。こうなると、腹をすえて体ごと正面からぶつかるしか方法はない。田中は組合役員を前にしてこういった。

「君らが中労委あっせん後の延長戦ではじめた職場闘争は、審判の目をごまかして一点先取りしたようなものだ。私はこの一点をどうしても取り返す。バットを一度も持ったことのない、ピンチヒッターだが、命がけで球筋を読み、たとえデッドボールでも塁に出る覚悟だ……」

●全工場に緑の記念碑

気迫もあったが、腹をわった話し合いもした。それから得た労使関係の〝哲学〟は、「まず人間関係、愛情と信頼で結ばれることの大切さ」であることを田中は痛感したという。

信頼にこたえた組合も大きく変わった。スト前の組合員は、その大半が労働協約を読んだこともなく、ただ組合幹部のいうままだった。それがスト後は協約や組合規約も読み、組合の方針にはよく考えて賛否を決めるようになった。長期ストで払った犠牲も大きかったが、新しい人間関係、労使関係が打ち出された。それが王子製紙の最大の経営資産となって、その後の発展に結びついた。

争議のあとの役員会で、田中は常務に抜てきされ、その四か月後には専務、さらに社長、会長へと進んだ。

一九七三（昭和48）年、王子製紙は創立百周年を迎えた。田中は社長として全社に呼びかけ、各工場に記念碑を建てた。その碑文にうたわれた緑化宣言は、二世紀目に踏み出した王子製紙の誓いでもあり、田中自身の固い決意でもあった。彼は高らかに宣言した。

「人よ、緑とともに生きよう」

緑化宣言の碑文
（写真提供　王子製紙株式会社）

（中村勝実）

参考文献

田中文雄他『私の履歴書』経済人22　日本経済新聞社

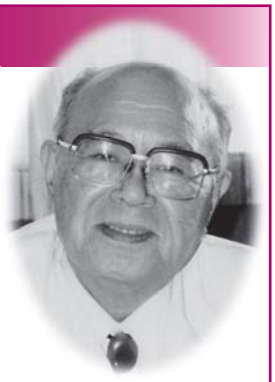
田中文雄『王子とともに五十年』日本経済新聞社

佐久の先人たち㉟

インスリン自己注射への道を開いた医師

吉沢國雄（よしざわくにお）

（1915～2008年）



インスリン自己注射の保険適応に尽力するなど長野県の糖尿病医療の礎を築いたパイオニアである。また保健・予防活動にも積極的で、住民への啓発活動、人材育成から診療にいたるまで真の「地域医療」を実践した。

●浅間病院初代院長として

吉沢國雄は一九一五（大正4）年、埼玉県比企（ひき）郡吉見町に生まれた。太平洋戦争が開戦した一九四一（昭和16）年に東京帝国大学（現東京大学）医学部を卒業後、陸軍短期現役軍医中尉として中国大陸へ出征する。戦後しばらく大陸に残り医師として仕事を続けたが、共産党軍による監禁なども体験し、一九五四（昭和29）年には帰国して東京大学医学部沖中（おきなか）内科に入局した。

その頃北佐久郡浅間町（現佐久市）に国保直営の病院を作ろうという動きが起こった。様々な困難を乗り越え、院長として東大から派遣されることとなった吉沢は、数名のスタッフとともに碓氷峠を越え、一九五九（昭和34）年に佐久の地に赴任した。

開設記念式典時の浅間病院

開院式当日には浅間山が噴火し、吉沢は日記に「浅間山の祝砲」と書き留めている。

●糖尿病外来の開設

今では国内の糖尿病人口は一千万人を超え、国民病となった糖尿病ではあるが、浅間病院開設当時はまだ「ぜいたく病」と言われるくらい珍しい疾患であった。しかし吉沢は佐久地域の実態調査から、農村地域でも東京と同等の糖尿病患者がいることを証明し、一九六〇（昭和35）年には長野県で初めてとなる糖尿病外来を開設した。

今や二千人近い通院患者がいることを思えばまさに先見の明と言えよう。外来開設の翌年には日本糖尿病協会の長野県支部を立ち上げ、浅間病院にも分会を作って糖尿病患者会活動を活発に行った。

さらに糖尿病領域への吉沢の大きな功績としてインスリン自己注射への道を切り開いたことが挙げられる。

糖尿病治療のためのインスリン注射は長らく保険が適用されず、自己注射もできなかったため、患者は建前上毎日通院して注射を受けなければならなかった。吉沢は「長野方式」と呼ばれるやり方で自己注射への突破口を開き、それが一九八一（昭和56）年の保険適用へとつながった。

これら長野県における糖尿病治療のパイオニアとしての業績を評価され一九九二（平成4）年、日本糖尿病学会から、糖尿病学の進歩ならびに糖尿病に関する啓発、福祉に著しく貢献したものに与えられる坂口賞が授与された。坂口は吉沢にとって東大の医局の恩師に当たる。

昭和53年7月 糖尿病教室

●脳卒中多発地域の汚名返上

吉沢は赴任当初から予防と診療の一本化、「病気に

ならないための運動」こそが必要と考えて地域医療を展開した。このため草の根検診、成人病（当時）・糖尿病予防のための検診を積極的に行った。さらに住民に対しては「健康は自らが守る」という思想の普及を目的とした講演活動を行い啓発に努めた。

一九六四（昭和39）年に長野県国保直診医師会初代会長となる。国保直診とは国からの補助金を得て市町村が設立した施設のことであり、吉沢はここを地域医療展開の場と考えた。

彼の手足となって働いたのは国保施設や行政の保健師（当時は保健婦）と住民の中から任命される保健補導員であった。一九七一（昭和46）年には佐久市保健補導員連合会結成、これは後に長野県保健補導委員会等連絡協議会結成へとつながる。

集団検診で診察する吉沢

二〇〇五（平成17）年に長野県は長寿日本一（男性第1位、女性第5位）となったが、40年前は男性9位、女性26位であり、さらに昭和30年代の佐久地域の脳卒中死亡率は全国でも最悪の水準であった。

吉沢らはモデル地区を設定してこの地域で何が問題なのかを研究。その結果「家の中が寒い」「塩分摂取量が多い」などの問題点が明らかとなった。そこで吉沢が中心となって保健師の指導、保健補導員の育成などを通じ減塩運動、一部屋暖房運動などを展開した。

これらの運動が功を奏し、昭和40年代に入り佐久市では脳卒中が激減したのである。佐久が健康長寿のまちとして全国的に有名になった礎は、佐久病院の若月院長と共に、予防医療の大切さを説いた吉沢らが築いたと言っても過言ではなかろう。

一九七四（昭和49）年七月、佐久市は住民の健康増進と保健衛生の向上を図るため、健康管理センターを設置、吉沢はその初代センター長に就任した。その二年後、佐久市に対し第28回保健文化賞が授与されたが、これは吉沢らの働きの成果に対する評価と言える。

●文化活動

吉沢の医療・保健分野での功績は多岐にわたり、かつ多大なるものがある。だが吉沢について語る時さらに文化的な側面を忘れる訳にはいかない。

父である吉沢三朗が生前に収集し、死後吉沢が受け継いだ中国陶磁器は、質の高いコレクションとして専門家の間でも有名であった。吉沢は自宅の敷地内に収蔵庫を作ってこれらを展示していたが、より多くの人々に公開し、研究に役立てる目的で一九九〇（平成2）年それらを佐久市と軽井沢町とに分けて寄贈した。佐久市立近代美術館には明から清時代（14世紀以降）、軽井沢町立歴史民俗資料館には漢から元時代（14世紀以前）の陶磁器が展示されている。

またアララギ派の歌人として生涯にわたって作句を続け、『佐久たかはら』『佐久野』『佐久春秋』『春秋残日吟』と四冊の歌集を刊行している。このうち第三歌集『佐久春秋』で一九九三（平成5）年、佐久文化賞を受賞した。

二〇〇八（平成20）年一一月九日、死去。生前よく糖尿病の患者相手に「一病息災」ということを説いていたがその通りを実践し、糖尿病、心筋梗塞の持病を持ちながら満93歳の長寿を全うした。

（仲　元司）

・・・

佐久の先人たち㊱

人間国宝に認定された陶芸家

松井康成（まつい こうせい）

（1927～2003年）

佐久に生まれ、茨城県笠間町の住職となった松井康成は、「練上（ねりあげ）」という手法で新しい陶芸の世界を生み出し、人間国宝に認定された。彼の作品には物と心の統一があるという。没後、遺族から信濃美術館へ１００点に及ぶ作品が寄贈された。

●小学校二年まで過ごした佐久望月

一九二七（昭和2）年といえば、本牧村望月（現佐久市）はまだ生糸景気の中にあり、製糸工場もあって、近隣から多くの人々が集まっていた。料理屋には芸者衆もいて賑わいを見せ、翌年には中山晋平が訪れて「望月小唄」がつくられるという時代であった。

この昭和2年五月、賑やかな街の中心で、松井康成は父宮城與四郎（みやぎよしろう）、母喜和乃（きわの）の次男として生まれた。本名は「美明（みめい）」である。幼いころいっしょに遊んだ近所の人たちは、美明をよく覚えていて、「おとなしかったが、とにかく頭は良かった。よく家にも遊びに行ったし、うちにも遊びに来た。父親は勤めに出ていたから記憶にないが、母親はいつも自宅で針仕事をしていたのが印象深かった」という。

一九二九（昭和4）年の世界恐慌は日本経済を直撃し、生糸輸出の激減、糸価の暴落は製糸業や養蚕農家に大きな打撃を与え、昭和恐慌と言われる時代が始まった。一九三六（昭和11）年三月、父は製糸業の鐘紡㈱をやめ、三ツ輪屋染工場を川崎市伊勢崎町に開業し、それに伴って一家も引っ越した。美明は九歳、川崎市旭町尋常（じんじょう）小学校三年に編入し、この頃父の染の仕事を手伝った。

●アルバイトで製陶所の手伝い

神奈川県立平塚工業学校工業化学科に入学した美明は、一九四四（昭和19）年、一七歳の時、学徒動員で平塚海軍火薬廠（かやくしょう）に行ったが、爆撃で工場が焼失、茨城県日立製作所にも赴（おもむ）いた。川崎の自宅も戦災を受けたので、家族は父の生地である茨城県笠間町に疎開移住した。一九四五（昭和20）年、同校を卒業。

終戦を迎え、父母のもとに戻った美明は、アルバイトで笠間の月崇寺（げっそうじ）下にある奥田製陶所へ通い、ロクロの技術などを学んだ。一九四七（昭和22）年明治大学専門部文科文芸科入学、この頃から東京国立博物館に通い、中国・朝鮮・日本の陶磁を研究した。また、浄土宗律師（りっし）養成講座受講のため、大正大学にも通った。

一九五二（昭和27）年明治大学文学部文学科卒業。この年、月崇寺住職松井英功（えいこう）・米子（よねこ）の長女秀子と結婚、松井姓となった。翌年住職が病に伏したため、大学卒業後勤務していた取手第二小学校教諭を辞め、月崇寺に入った。その頃から、日本画を習って、翌年には県展に出品するほどになった。一九五五（昭和30）年、月崇寺二四世住職となった。

●「練上（ねりあげ）」で新しい技術を生み出す

月崇寺には江戸時代安政年間（一八五四～一八五九）に築かれた窯があった。一九六〇（昭和35）年、美明はこの窯を復興し、日本の古磁器を研究して、それを模した作品を制作し、また練上技法を試作研究した。

一九六二（昭和37）年、長男が生まれ、「康成」と名付けたが、その後美明が作品を展示会などに出したとき、「康成」という名を使い、それで入選したので

練上線紋大鉢（ねりあげせんもんおおばち）　1973年作
茨城県陶芸美術館蔵

そのまま康成の名を自分で使うようになった（そのため長男は現在「康陽」と名乗っている）。一九六八（昭和43）年東京芸術大学教授の田村耕一に師事し、「いろいろ試すことも大事だが、作風を一つに絞ることも大切だ。練上にしぼるのがいいのではないか」と教えられ、以後それを忠実に守って作陶をすすめた。

一九六九（昭和44）年第九回伝統工芸新作展に初出品し「練上手大鉢」で奨励賞を受賞、次の年は「練上手辰砂鉢」で日本工芸会賞を受賞した。そしてその次の年は日本伝統工芸展において日本工芸会総裁賞を受賞した。これだけ世間の注目を急に浴びることになったのは、康成が、今までにない新しい陶磁の世界を切り拓いたからである。

●陶芸では信州で初めての「人間国宝」

練上または練込は、中国では唐や宋の時代に、朝鮮では高麗青磁の一部に、そして日本では桃山時代の志野焼などにみられる伝統的な技法である。練上は色の異なる土を重ねたり練り合わせたりして文様のある生地土を作り成形する技法である。二種類以上の土を使うので、乾燥や焼成の過程で亀裂が入りやすいのだが、康成は色剤などを用いてこれを克服した。

成形には型を使うほか、文様を組み合わせた板状の土を筒に巻きつけ、筒を抜いて口口を回し、内側からふくらませるという手法を考案した。表面をふくらませる過程で生じるひび（亀裂）は、複雑な文様を作り、そこからさまざまな技法が生まれ、全く新しい陶磁の世界が展開されるようになった（練上嘯裂文）。

練上嘯裂茜手壺　1982年作
茨城県陶芸美術館蔵

晩年には「玻璃光」という技法による硬質な光沢に包まれた作品を発表している。国内はもちろん、康成の作品は世界各国の展覧会に展示された。一九九三（平成5）年、重要無形文化財「練上手」保持者（人間国宝）に認定された。信州生まれとしては初めての、陶芸分野での人間国宝である。

●作品の根底にある宇宙観

康成は自分の作品について「（私のつくってきた陶器は）壺のようなまるい形の作品が最も多かったように記憶しています。何故かというと、まるい珠の形は、この宇宙が目指している唯一の形ではないだろうかという思いにとらわれてきたからです」と語っている。

また、兵庫陶芸美術館長の乾由明は「（康成の作品は）外見上は煌めくような感覚的魅力に満ちた芸術作品であっても、これを内から観ずれば彼の独自な宗教的思念が結実したものに他ならない。」と評している。

七〇歳を超えてからも数々の作品を発表し続けた康成は、二〇〇三（平成15）年四月死去。茨城県陶芸美術館に康成作品三〇〇点が寄贈された。

生まれ故郷の信州は、ずっと康成の脳裏にあったに違いない。その遺志をついで、二〇〇五（平成17）年、遺族から信濃美術館に康成の大作一〇〇点が寄贈された。それを記念し、同年信濃美術館では「信州が生んだ人間国宝、土と炎の奇跡、追悼松井康成展」が開催された。

（吉川徹）

参考文献

松井康成『宇宙性』講談社
『松井康成陶瓷作品集』講談社
信濃美術館『土と炎の奇跡　追悼松井康成展』朝日新聞社

佐久の先人たちが生きた時代

	先人（第一次選定18人）			室町	安土桃山	江戸	明治	大正	昭和	平成
	氏　名	生年	没年	1550	1600	1650 1700 1750 1800	1850	1900	1950	2000
1	市川　五郎兵衛	1571	1665							
2	臼田　丹右衛門	1776	1857							
3	市　川　代治郎	1826	1896							
4	大　給　　恒	1839	1910							
5	神　津　邦太郎	1865	1930							
6	佐　藤　寅太郎	1866	1943							
7	大　井　富　太	1868	1928							
8	神　津　藤　平	1871	1960							
9	比田井　天　来	1872	1939							
10	桜　井　弥一郎	1883	1958							
11	川　村　吾　蔵	1884	1950							
12	小　林　多津衛	1896	2001							
13	田　河　水　泡	1899	1989							
14	丸　岡　秀　子	1903	1990							
15	山　室　　静	1906	2000							
16	竹　内　　好	1910	1977							
17	若　月　俊　一	1910	2006							
18	井　出　一太郎	1912	1996							

主なできごと	（全般）
	東日本大震災
	アメリカ同時多発テロ事件発生
	長野オリンピック開催
	阪神・淡路大震災
	湾岸戦争
	イラン・イラク戦争
	日中国交回復
	日本万国博覧会（大阪万博）開催
	東京オリンピック開催
	朝鮮戦争
	原爆投下、第二次世界大戦終戦
	太平洋戦争激化
	第二次世界大戦
	満州事変
	世界恐慌
	関東大震災
	第一次世界大戦
	日露戦争
	日清戦争
	大日本帝国憲法発布
	西南戦争
	廃藩置県
	大政奉還　王政復古の大号令
	皇女和宮降嫁、公武合体運動が進む
	大老井伊直弼による安政の大獄
	ペリー来航→日米和親条約締結
	老中水野忠邦による天保の改革
	大塩平八郎の乱
	幕府が外国船打払い令を出す
	フランスでナポレオンが皇帝となる
	フランス革命
	松平定信、老中となる（寛政の改革）
	浅間山、天明の大噴火
	アメリカ独立戦争→独立宣言
	公事方御定書を定める
	享保の大飢饉、各地で一揆や打ちこわし
	吉宗、八代将軍となる（享保の改革）
	富士山、宝永の大噴火
	生類憐みの令が出される
	深良用水（箱根用水）完成
	慶安の御触書
	ポルトガル船来航禁止（鎖国）
	参勤交代制度化
	大阪冬の陣、夏の陣
	徳川家康、江戸幕府を開く
	関ケ原の戦い
	朝鮮出兵
	豊臣秀吉、全国統一
	本能寺の変
	織田信長、安土城を築く
	桶狭間の戦い
	川中島の合戦

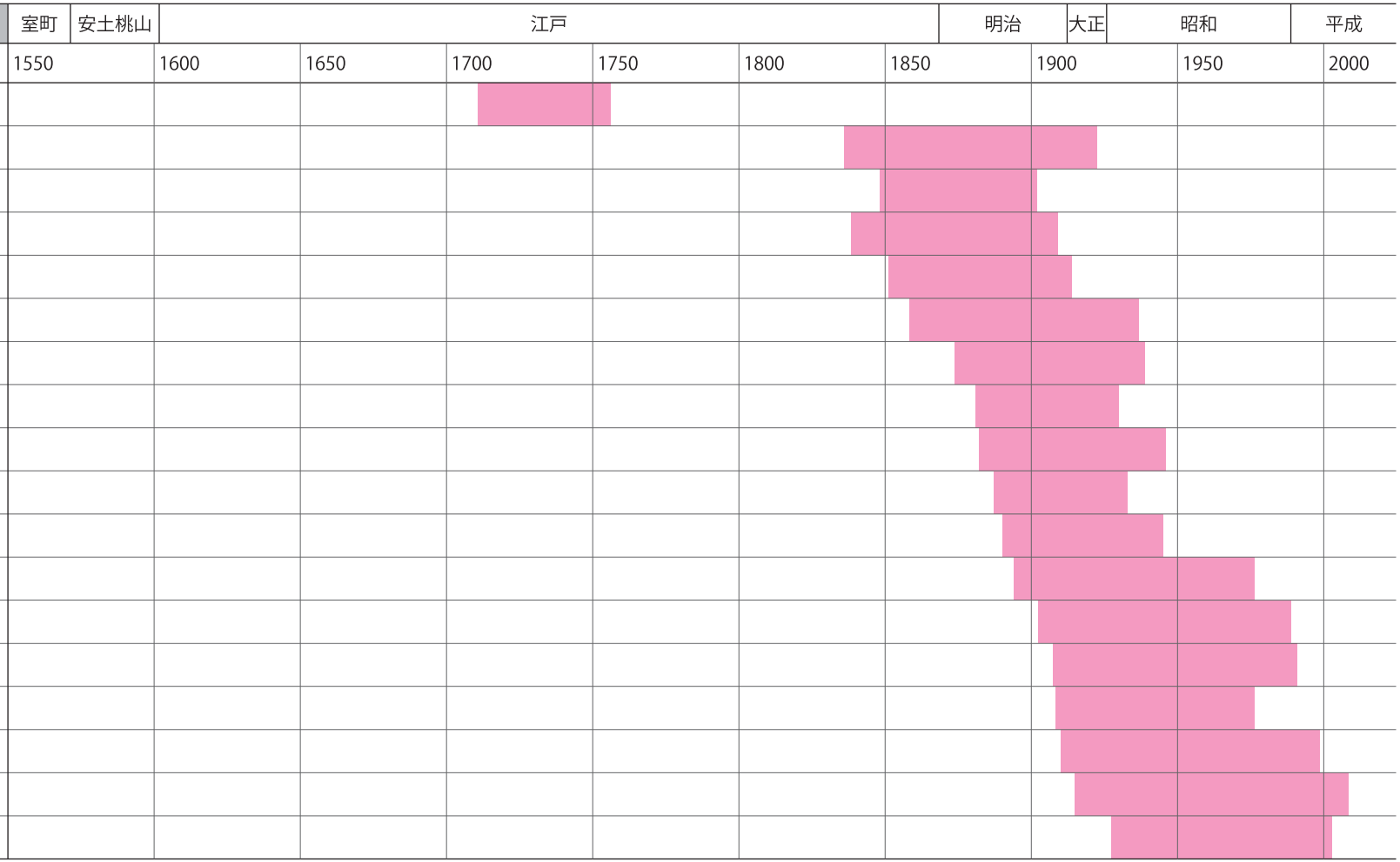
主なできごと（佐久／長野関係）

氏名	主なできごと
小林　孫左衛門	武田信玄、佐久郡から上州安中へ出陣
松本谷吉	依田信蕃、岩尾城攻撃の際に戦死
清水清吉	仙石秀久、小諸城に入り佐久一円を支配
市川又三	松本城の大天守完成
依田稼堂	秀久の苛政に対し百姓逃散が相次ぐ
岡村政子	佐久郡村々、貫高制から石高制へ移行
瀬下清	小諸藩領、甲府徳川家の所領となる
篠原和市	青山氏、佐久・小県両郡三万石を所領
神津猛	小諸城主青山宗俊、大阪城代に転出
小池森太郎	洪水により大凶作。延宝飢饉が始まる
小池勇助	松本領内で大規模な一揆（貞享騒動）
柳本みつの	牧野氏が小諸、内藤氏が岩村田に入封
森泉武重	大給藩、佐久郡一万二千石の所領開始
中澤周三	奥殿藩、財政改革に着手
相馬遷子	岩村田藩、財政再建を実施
田中文雄	戌の満水
吉沢國雄	上田領内で大規模な一揆（宝暦騒動）
松井康成	上州・信州打ちこわし

氏名	主なできごと
小林　孫左衛門	善光寺大地震
松本谷吉	岩村田城、龍岡城の築城開始
清水清吉	偽官軍（赤報隊）事件
市川又三	長野・筑摩両県合併、長野県に統一
依田稼堂	秩父事件
岡村政子	信越線（横川～軽井沢間）開業、全通
瀬下清	島崎藤村小諸義塾に着任
篠原和市	長野種馬所開設
神津猛	佐久鉄道（小諸～中込間）開業
小池森太郎	佐久鉄道（羽黒下～小海間）開通
小池勇助	警廃事件
柳本みつの	小海線（清里～信濃川上間）開業、全通
森泉武重	種場所内に海軍飛行場建設
中澤周三	佐久市発足（浅間町＋東村＋野沢町＋中込町）
相馬遷子	佐久大橋完成
田中文雄	R254内山トンネル開通
吉沢國雄	臼田宇宙空間観測所完成、開所
松井康成	上信越自動車道佐久IC開業
	長野新幹線開業
	新佐久市発足
	中部横断自動車道佐久南IC開業

先人（第二次選定18人）

	氏名	生年	没年
19	小林　孫左衛門	1721	1756
20	松本谷吉	1836	1923
21	清水清吉	1848	1902
22	市川又三	1838	1909
23	依田稼堂	1851	1914
24	岡村政子	1858	1936
25	瀬下清	1874	1938
26	篠原和市	1881	1930
27	神津猛	1882	1946
28	小池森太郎	1887	1933
29	小池勇助	1890	1945
30	柳本みつの	1894	1976
31	森泉武重	1903	1988
32	中澤周三	1907	1991
33	相馬遷子	1908	1976
34	田中文雄	1910	1998
35	吉沢國雄	1915	2008
36	松井康成	1927	2003



※上記の表は、第一次の先人（平成24年7月号広報別冊で紹介）並びに、今回紹介した第二次の先人たちが生きた時代と、その時代の主なできごとをまとめたものです。
紹介文とあわせ、先人たちが活躍した時代背景や、先人同士の関係を知る手がかりとしてください。

佐久の先人検討委員会からのお知らせ

佐久市にゆかりがある様々な先人たちを紹介することにより、ふるさとへの愛着や誇りの気持ちを高めていただくため、平成２２年度から始まった「佐久の先人検討事業」は、執筆者をはじめ、委員・監修者、関係各位のご尽力およびご協力をいただく中で、第一次と合わせ３６人の先人を皆様に紹介することができました。

おかげを持ちまして、「偉大な先人達を生んだ佐久を誇りに思う」「教育の現場で活用したい」「選定された以外の先人も紹介してほしい」など、様々な反響をいただいております。

しかし、限られた文字数の中では、紹介しきれなかった先人の業績やエピソードも多々ありますし、紹介した以外にも、佐久にゆかりのある先人が数多く存在しています。

紹介文を単に一読されるだけでなく、家庭や学校、職場などで広く話題としていただくほか、自ら文献を調べたり、先人ゆかりの場所や施設を訪ねたりすることなどにより、この先人検討事業をきっかけとして、様々な分野に興味が広がり、これまで知られていなかった先人の発掘や、地元の魅力の再認識につながればと願っております。

今後も様々な場所や機会において佐久の先人が取り上げられ、また語り継がれていきますよう、引き続き事業に対するご理解とご協力をお願いいたします。

今後紹介してほしい先人や、先人に関する情報をお寄せください

・選定の考え方

①江戸時代以降の人　②物故者　③佐久の歴史、風土、生活を支えた人
④市民やこどもに語り継ぎたい人など

以上４点を参考に先人の推薦を募集しております。

・推薦書（先人に関する情報）の内容

①推薦したい先人の氏名、出身地　②推薦理由や先人の経歴・業績
③参考にした本（文献・資料）の名称など

以上３点を記入し推薦して下さい。（任意の様式で結構です）

・推薦書（先人に関する情報）の提出先及びお問い合わせ先

佐久市教育委員会　社会教育部　文化振興課
〒385-0043　長野県佐久市取出町183　野沢会館内
☎0267-62-0664　FAX0267-64-6132
Eメール：bunkasisetsu@city.saku.nagano.jp